

Japan Evangelical Churches 正・補教師セミナー

2003.11.16
甲山自然の家

理想像の喪失？ 福音派の拡大と同一性の危機

多様性は崩壊を意味はしないし、崩壊を示唆することもない...。ただし、福音的な焦点と共通の関心事を欠くと、...特に**教理的関係の問題に対する興味の欠如**が明らかに拡大しつつあることは、この運動の核心をむしばむことになりかねない深刻な危険をはらんでいる。

...一例として米国では、南部バプテスト連盟の内部で、**教理的洞察力の深刻な喪失**が明らかになっている。このヴィジョンの喪失は、自分たちが**受け継いできたものに対する関心の不足**から容易に起こりうる。

バプテストの、特に米国におけるバプテストの思想を最近まとめた文章で、ティモシー・ジョージとデヴィッド・S・ドッケリーは、次のような考え方がバプテストの間で多くなっていると言う。

「バプテストは、本来が**教理重視のグループではない**。われわれには**聖書のほかに信条はない**し、聖書は誰もが**個人的好み**に従って**解釈すべき**ものである。神学の基礎となる**基準は個人の経験**であり...バプテストとは**自由**を意味する。**束縛されずに考え、信じ、宣教する自由**を。」

だが、ジョージとドカリーが指摘するように、それは容易に「**根なし草**」の意味にもなりうる。この「**成熟しきった無関心のイデオロギー**」と明らかに同じものが他の多くの主要教派にも存在する。

アメリカのゴードン・コンウェル神学校(福音派)のD. ウェルズ教授はその著作「No Place for Truth」の中で、福音派教会内部における「**聖書の真理の喪失の事態**」と「**アイデンティティの希薄化現象**」を指摘しています。

歴史神学軸

使徒

古代

宗改

四つ

ア・カ

信条

正統

敬虔

フリ-

リベラル

伝統的
E

実用的
E

ヤンガ
-E

【内容】

1. アイデンティティの希薄化現象について(p.1)
2. 聖書と歴史的運動の中での解釈の遺産が、組織神学に結実(p.2)
3. 伝統的福音主義から実用的福音主義へ、そしてその次には(p.3)
4. JECの神学的座標軸(歴史神学篇) Pプレジユメ(p.4-7)
5. JECの神学的座標軸(組織神学篇) Pプレジユメ(p.8-10)
6. JEC50周年小論文『JECの神学的輪郭とその座標軸を模索する』(要約版) p.11-16
7. JECニュース原稿『JECの源流と歴史的遺産』(詳述版) p.17-49
8. 付録: エリクソン神学を座標軸にして「JECの聖化論」を考察した菅論文要旨 p.50-56

終末論

教会論

救済論

聖霊論

キリスト論

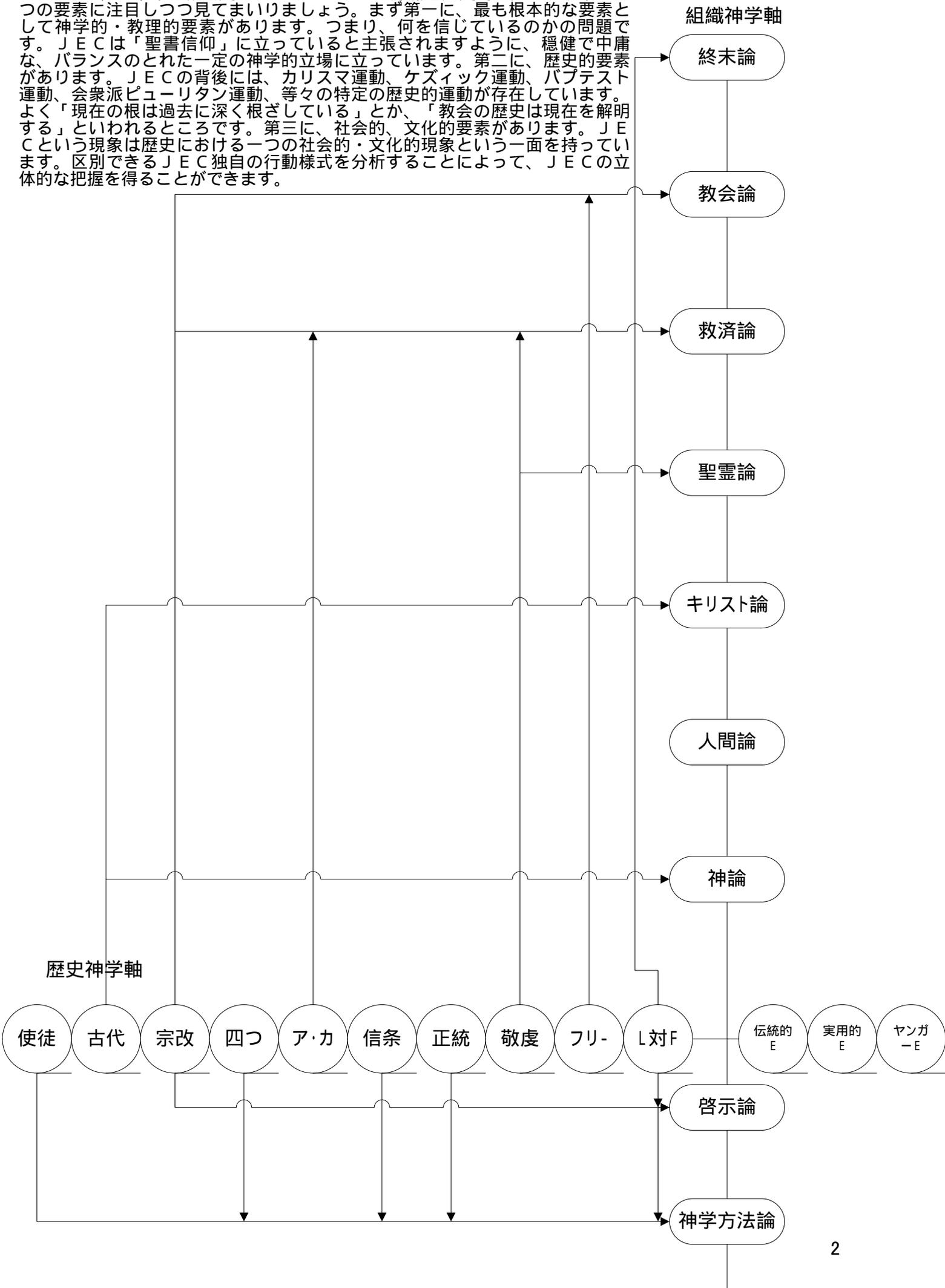
人間論

神論

啓示論

神学方法論

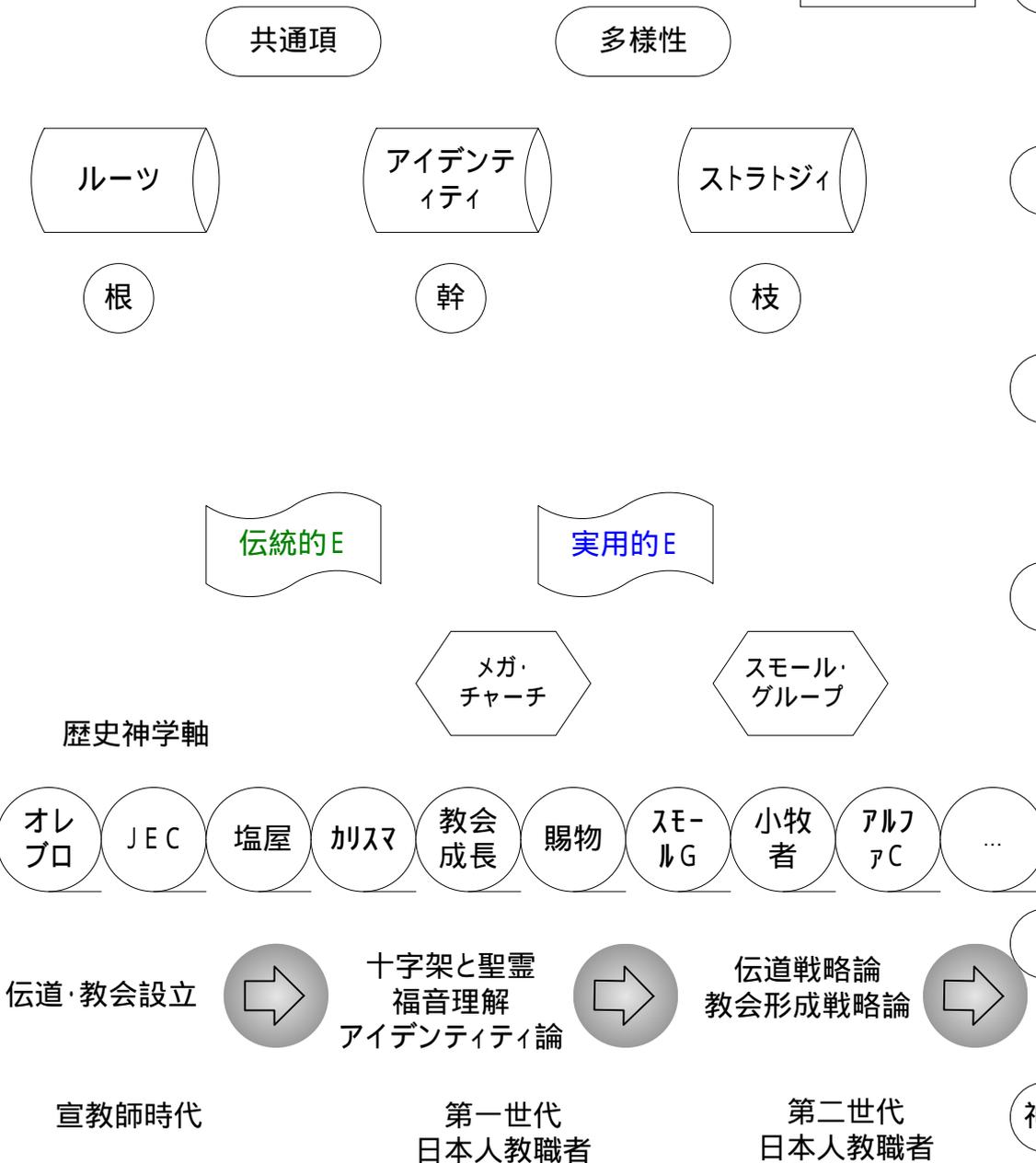
それでは、二千年の教会史における「JECの源流と歴史的遺産」を以下の三つの要素に注目しつつ見てまいりましょう。まず第一に、最も根本的な要素として神学的・教理的要素があります。つまり、何を信じているのかの問題です。JECは「聖書信仰」に立っていると主張されますように、穏健で中庸な、バランスのとれた一定の神学的立場に立っています。第二に、歴史的要素があります。JECの背後には、カリスマ運動、ケズィック運動、バプテスト運動、会衆派ピューリタン運動、等々の特定の歴史的運動が存在しています。よく「現在の根は過去に深く根ざしている」とか、「教会の歴史は現在を解明する」といわれるところです。第三に、社会的、文化的要素があります。JECという現象は歴史における一つの社会的・文化的現象という一面を持っています。区別できるJEC独自の行動様式を分析することによって、JECの立体的な把握を得ることができます。



JECは、「エリクソンの神学をJECの“神学的座標軸”と位置づけ、その下にJECの過去と現在の霊的遺産を適切に整理し、そして今後展開していくであろう種々のムーブメントを適切に関係づける」というかたちで、JECの流れの中でのよきものを継承・深化・発展させていく軌道を敷設することができる...

福音主義的霊性の探求

この点についてすぐれた解説者のひとりがジェームズ・I・パッカーで、...彼の含蓄の深い1989年の講義「組織的霊性への序論」を考察したい。前にも注目したが、その中で彼は、神学と霊性を分離することは全く不可能であると説いている。特に、パッカーは霊性を「もっと聖書的、神学的な支配下に置くこと」の必要性に注意を喚起し...



組織神学軸



JECの共通項と多様性

JECが聖書を神学の根源、キリスト者生活の究極的基準として強調することで、JEC内の多様性は、聖書的に認められる多様性でしかないことが確認される。言い換えれば、JEC内の多様性はそれと対応する多様性が聖書に見られるならば容認される。聖書自体がアプローチに一定の幅を含むか許容している場面では、JECは自分たちの間にも同様の幅のあるアプローチのあることを当然と考えるべきである。結合を強化しようとしてこの多様性を押さえ込むのは、キリスト教信仰の聖書的基盤を歪めることになりかねない。

JECの神学的座標軸

- 歴史神学軸(横軸) -

2003.11.16 甲山自然の家
JEC正・補教師セミナー
一宮基督教研究所
安黒務

1

古代教会の正統信仰としてのJEC

1. 異端: 主要教理の軽視
2. 正統: 公同性、古代性、一致同意
 1. 三位一体論
 2. 神人二性一人格論

4

序: ルーツについて

1. JEC スウェーデン・オレプロ・ミッション (インターアクト) スウェーデン・バプテスト諸教会
2. SB アメリカ・バプテスト 会衆派ピューリタン(英国宗教改革)
3. 宗教改革 古代の正統信仰 初代教会の信仰 キリストの死・葬り・復活の事実

2

宗教改革の子孫としてのJEC

1. 中世カトリックを背景にした宗教改革
2. 改革の三大原理
 1. 聖書のみ
 2. 信仰義認
 3. 聖徒の交わりとしての教会

5

使徒的キリスト教としてのJEC

1. 聖書における創造・福音の記述
2. 神話・創作とみる立場
3. 事実の記述・描写とみる立場

3

英国プロテスタントからの分岐としてのJEC

1. ルター派、カルヴァン派、アナバプテスト派、英国のプロテスタント
2. 英国のプロテスタント(ピューリタン運動)
3. 会衆派ピューリタン バプテスト派
4. 第二ロンドン告白: ウェストミンスター信仰告白との関連

6

予定論論争におけるJEC

1. アルミニウス主義とカルヴァン主義
2. 人間の自由意志と神の主権
3. 聖書は神学よりも大きい
4. 両者を包摂していく

7

敬虔主義運動の体質をもつ群れとしてのJEC

1. 正統主義神学の正統的实践
2. 敬虔主義運動
3. ケズィック運動のメッセージ
4. ウォッチマン・ニー「キリスト者の標準」
 1. ケズィック運動のメッセージとW. ニーの分離
 2. W. ニーの人間論・教会論・終末論等には問題あり
 3. 異端: ウィットネス・リーと日本福音書房

10

簡易信条主義としてのJEC

1. 信条
2. 信条主義の教会
3. 簡易信条主義の教会

8

自由教会としてのJEC

1. 教会と国家とが明確に分離した社会
2. 独立と自治を有し、目的を同じくする者の自発的共同体

11

正統主義神学との連続性をもつJEC

1. 宗教改革の遺産の体系化
2. カルヴァン トゥレタン ホッジ
3. ストロング、シーセン エリクソン

9

福音主義同盟の一員としてのJEC

1. 啓蒙思潮
2. 自由主義神学: 「適応・適合」の道
3. 福音主義神学: 近代理性との戦い

12

ローザンヌ運動の推進者としてのJEC

1. プレ・ローザンヌ
2. ローザンヌ会議
3. ポスト・ローザンヌ

13

聖霊のメッセージ

1. 歴史的背景
 1. カトリック:
 2. 保守プロテスタント福音派:
 3. ペンテコステ福音派:
2. 今世紀の展開
 1. ペンテコステ運動
 2. カリスマ運動
 3. 第三の波の運動

16

序:アイデンティティについて

1. ルーツとアイデンティティの関係
2. 2000年の歴史の中の50年の運動
3. 「十字架と聖霊」:我喜屋師
4. 十字架とは:義認論・聖化論
5. 聖霊とは:聖霊論の中の賜物論

14

聖霊のメッセージ

1. 表現の多様性
2. JEC:「聖霊のバプテスマもしくは満たし」
3. 保守福音派とペンテコステ福音派の真ん中:二股、架け橋的位置
4. 異言理解:“アバ”意識からの派生語 - 霊による祈りと賛美
5. 「聖霊の満たし」の真の目的は何か

17

十字架のメッセージ

1. スウェーデン・バプテスト:漸進的聖化論
2. 塩屋の神学校:危機的聖化の強調
3. 折衷的理解:「キリスト者の標準」
4. ローカル・チャーチ運動の顕在化
5. 「ウォッチマン・ニー」ブーム去る
6. しかし、敬虔主義運動の遺産の継承は大切

15

序:継承・深化・発展への輪郭

1. 意味ある選択肢、市民権の獲得
2. 神学的特質の確認

18

聖書的事であること

1. 教派的伝統・特色の盲目的継承ではなく
2. 聖書的適格性の絶えざる吟味
3. 伝統の良き部分の継承・深化・発展を目指す

19

自己革新性

1. 非批判的伝統主義ではなく、
2. 「改革された教会は常に改革され続ける」べき
3. 批判的学問性: JECの流れの検証力
 1. 時代遅れのもの、変革すべきもの
 2. 継承・深化・発展させるべきもの

22

公同的事であること

1. 分派的・自己流ではいけない
2. つまり、JEC独自の表現・体験的証しを
3. 教派を越えて理解されうる、包括的な神学の中に位置づけ、表現していく
4. 特に、十字架経験と聖霊経験において
5. 公同性を反映させていく努力
6. そして、次の世代へ継承していく

20

M. J. エリクソンの神学

1. JECの神学的座標軸となりうる神学書
2. M. J. エリクソンの組織神学、書籍群
 1. スウェーデン・パプテスト系
 2. 牧会者のハートと神学者の知性
 3. 四つの特徴を宿す
3. 福音派のスタンダードとしてのJEC
4. カリスマ的なことにオープンなエヴァジェリカルとしてのJEC

23

現代的適応性

1. 聖書の使信をオウム返して語る: シーセン
2. 今日的情況に即して、新しく語る: エリクソン
3. 集会やムーブメントからの刺激・メッセージの収集とともに
4. JEC関連の神学書の収集・継続的研究

21

JECの神学的座標軸

- 組織神学軸(縦軸) -

2003.11.16 甲山自然の家
 JEC正・補教師セミナー
 一宮基督教研究所
 安黒務



「第二部 神の啓示」とJEC

1. 神の普遍的啓示
2. 神の特別啓示
3. 啓示の保存: 靈感
4. 神の言葉の信頼性: 無誤性
5. 神の言葉の力: 權威



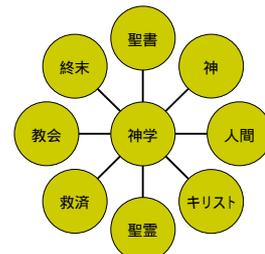
「キリスト教神学」の要約版 「キリスト教教理入門」概略

1. 神学をすること
2. 啓示
3. 神の性質
4. 神のみわざ
5. 人間
6. 罪
7. キリストの人格
8. キリストのみわざ
9. 聖霊
10. 救い
11. 教会
12. 終末



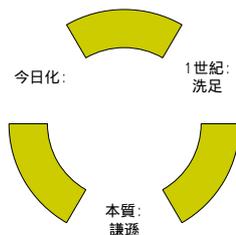
「第三部 神の性質」とJEC

1. 神についての教理
2. 神の偉大さ
3. 神の善良さ
4. 神の三一性: 三位一体



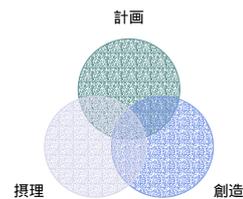
「第一部 神学をすること」とJEC

1. 神についての研究
2. キリスト教のメッセージを今日化すること



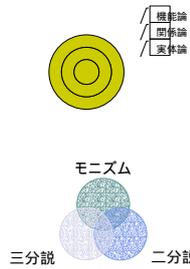
「第四部 神のみわざ」とJEC

1. 神の計画
2. 神の原初のみわざ: 創造
3. 神の継続のみわざ: 摂理
4. 悪と神の世界: 特別の問題
5. 神の特別の代理人: 天使



「第五部 人間」とJEC

1. 人間の教理についての導入
2. 人間における神の像
3. 人間を構成している性質



7

「第八部 キリストのみわざ」とJEC

1. キリストのみわざへの導入
2. 贖いの中心的主題



10

「第六部 罪」とJEC

1. 罪の性質と源
2. 罪の結果
3. 罪の程度



8

「第九部 聖霊」とJEC

1. 人格
 1. 神性
 2. 人格性
2. 働き
 1. 旧約
 2. 新約
 1. イエス
 2. クリスマン生活
 3. 今日におけるしるしと不思議



11

「第七部 キリストの人格」とJEC

1. キリストの神性
2. キリストの人性
3. キリストの人格の統一性



9

「第十部 救い」とJEC

1. 救いの概念
2. 救いの先行性: 予定
3. 救いのはじまり
 1. 主観的側面
 2. 客観的側面
4. 救いの継続
 1. 聖化
 2. 堅忍
5. 救いの完成
 1. 栄化



12

「第十一部 教会」とJEC

1. 教会の性質
 1. 神の民
 2. キリストのからだ
 3. 聖霊の宮
2. 教会政治
 1. 監督制
 2. 長老制
 3. 会衆制
3. 教会の儀式
 1. 洗礼
 2. 聖餐



13

「第十二部 終末」とJEC

1. 導入的事柄と個人終末論
2. 再臨とその結果
3. 千年王国と大患難の見方
4. 最後の状態



14

- 過去・現在・未来を眺望して -

J E C の神学的輪郭とその座標軸を模索する

J E C 宣教 5 0 周年記念誌小論文

山崎チャペル（一宮基督教研究所）：安黒務

< 序 >

ずっと以前、フレッド・スンベリ師に「K B I の二十五周年の記念論文」をお願いしましたとき、「過去のことはもういい、未来のことを考えよう！」と言われたことを思い出します。今回 J E C 宣教 5 0 周年を機会に“ J E C のルーツとアイデンティティ ” を過去・現在・未来というマクロ的な視野から模索し、ひとつの試案として“ J E C の神学的輪郭とその座標軸 ” を描きだしてみたいと思います。

< 1 > 過去：J E C のルーツについて

まず J E C のルーツについて、歴史的におおまかにさかのぼっていくことにしましょう。J E C のマザー・ミッションは、「スウェーデン・オレブロ・ミッション（現在は三教派合同により“ インターアクト ”）」です。スウェーデン・オレブロ・ミッションは、「スウェーデン・バプテスト系諸教会」を基盤としています。スウェーデン・バプテスト教会のルーツは英国の宗教改革であります「ピューリタン運動」の流れにあります。ピューリタン運動は 1 6 世紀のルターやカルヴァンの「宗教改革の流れ」の中のひとつにあたります。宗教改革は、ある意味で「古代の正統教理」を継承する運動であります。そして古代の正統教理は、「初代教会の信仰」に根差しており、「イエス・キリストの死・葬り・復活の事実と使徒たちの証言」を基盤にしています。

このような理解に立ち、私なりにもう少し詳しく記述していきますと、第一に「初

代教会」との関連におきましては、「聖書における創造や福音を神話とか創作とみる立場」とは異なり、JECは使徒たちの信じていた通りの**使徒的キリスト教**を割り引きもせず、水増しもせず、忠実に継承し、それを熱烈にあかす群れです。

第二に「古代教会」との関連におきましては、「主要教理を軽視して異端に走る群れ」とは異なり、JECとはあらゆるところで（共同性）、常に（古代性）、すべてによって（一致同意）信じられてきた**正統信仰の根幹**を基本とする群れです。三位一体論やキリストの神人二性一人格論などがそれにあたります。

第三に「中世を背景にした宗教改革」との関連におきましては、JECは「聖書のみ（が神の唯一のことば）」「信仰義認（キリストの贖いのみによる罪の赦し）」「（法王を中心とするピラミッド型の構造ではなく）聖徒の交わりとしての教会（万人祭司）」の三大原理を忠実に継承する**宗教改革の子孫**です。

第四に「宗教改革における四つの流れ（ルター派、カルヴァン派、アナバプテスト派、英国のプロテスタント）」の関連におきましては、JECは**英国のプロテスタント（ピューリタン運動）につながりをもつ流れ**です。実際にバプテストの信仰告白のひとつであります第二ロンドン告白は、「ピューリタン神学の華」といわれます**ウェストminster信仰告白**のうち、教会論のみを**会衆制**に変えたものと言われている。

第五に「アルミニウス主義対カルヴァン主義の論争」の関連におきましては、JECは神は常に神学よりも大きいし、聖書は私たちの組織的成文化よりもずっと豊かで大きいという理解の下に**両者を包摂する立場**をとる群れです。スウェーデン・バプテスト系の流れはカルヴァン主義者を主としつつ、アルミニウス主義者をも包摂していると聞きます。

第六に「信条主義」の関連におきましては、JECは**簡易信条主義**の立場をとっていますが、信条は常に誤りのない聖書に従属することを認識しつつ、バプテストの信仰告白をはじめとし、ウェストminster信仰告白などの**諸信条の価値**を認め、それらからも学ぶ群れです。

第七に「正統主義神学」との関連におきましては、JECは宗教改革の遺産の体系化であります17世紀のプロテスタント正統主義と近代の福音派の神学との**連続性を認識する群れ**です。KBIで使用されてきました**ヘンリー・シーセン**の「組織神学」や現在使用されています**ミラード・エリクソン**の「キリスト教教理入門」もそれらを継承しているものです。

第八に「敬虔主義運動」との関連におきましては、JECは正しい教理は正しい生活実践を伴わなければならないと考える**敬虔主義運動の体質**を有する群れです。「**十字架のメッセージ**」もその霊的遺産のひとつです。

第九に「自由教会（フリー・チャーチ）運動」との関連におきましては、JECは教会と国家とが明確に分離した社会において独立と自治を有する「目的を同じくする自発的共同体」としての群れです。「**明確に新生したものだけに、浸礼を授け、その**

メンバーで教会形成をする」バプテストの流れはその典型です。

第十に「リベラリズム（自由主義神学）と福音主義」との関連におきましては、JECは「聖書を誤りのある歴史的・宗教的一文書」としてみるリベラリズムに危機感を抱いて1846年に結成された「聖書を神によって靈感された誤りのないことば」として見る福音主義同盟の9項目より成る福音主義信仰にたつ群れです。オレブロ・ミッションはスウェーデン福音同盟に所属しており、世界福音同盟の一員でもあります。JECは日本福音同盟に加盟していませんが、同じ立場に立っていることに疑いの余地はありません。

そして第十一に「世界宣教運動」との関連におきましては、JECは「世界宣教運動を非聖書的な方向に向けてきたWCC（世界キリスト教協議会）」に対抗して開催されました1974年の「ローザンヌ世界伝道会議」が明らかにしました「ローザンヌ誓約」の聖書的な「福音的信仰と宣教観とライフ・スタイル」を信奉するところの群れです。オレブロ・ミッションは、1978年の総会で「ローザンヌ誓約」を宣教活動の基本方針として採択しました。JECも同様の福音理解と宣教観の流れの中にあるとあってよいでしょう。以上、キリスト教史2000年の流れの中に歴史的ルーツとの連続性をもつJECについてみてまいりました。（参考文献：宇田進「福音主義キリスト教と福音派」、他）

< 2 > 現在：JECのアイデンティティについて

次に、JECのアイデンティティについてみてまいりましょう。まず明らかなことは、ルーツとアイデンティティを切り離すことはできないということです。すでに記述してきました内容において“JECのアイデンティティ”の九割方が決定づけられていると思います。ここ50年間のJECの中心的流れは、我喜屋師に代表される「十字架と聖霊」のメッセージといえると思います。ただそれらは新しい、あるいは奇異なものではなく、すでに継承されてきました聖書の啓示とキリスト教神学の歴史の“絶大な霊的な遺産”の一領域、特に救済論の中の「聖化論」と聖霊論の中の「聖霊の賜物論」の領域に聖霊がその時代状況の中で解き明かしの光を注がれた時代であったとあってよいでしょう。このメッセージの神学的輪郭を二つに分けて描きたいと思います。（参考資料：「シカゴ・コール」、他）

「十字架」のメッセージ

十字架のメッセージは、JECの第一世代の日本人教職者に共通するものと聞いています。第一世代の先生方が「“きよめ（危機的聖化）”を強調する塩屋の神学校」で学ばれたことも関係があると思います。スウェーデン・バプテストの流れは基本的に「聖化を一生涯の漸進的過程」において捉える理解です。それらの両者の折衷的理解として有名なウォッチマン・ニーの「キリスト者の標準」においてメッセージの輪郭が明確にされてきたようです。

ウォッチマン・ニーの「キリスト者の標準」や「キリスト者の行程」は、**ケズィック聖会におけるメッセージ**を資料源として芸術作品のように仕上げられたものであるとされています。「ケズィック」は英国のリゾート地の名前で、そこで毎年開催されている「ホーリネスを強調する」聖会の名前です。ただ、ケズック運動は組織とか教派ではなく、超教派の聖会であり、聖公会・バプテスト・長老派そして他の教派から多くの著名な説教者が奉仕しています。**教理的には幅広い多様性**があります。そしてこれらの**メッセージの流れは、歴史的に「敬虔主義運動」に包括し位置づけることができる**と思います。（参考文献：ダナ・ロバーツ「ウォッチマン・ニーを理解する」、他）

「聖霊」のメッセージ

聖霊のメッセージとは、今世紀中期からの**「聖霊カリスマ運動」**からのものです。今世紀初頭からのペンテコステ運動は、スウェーデンにも波及し、スウェーデン・バプテスト同盟から分離した諸教会は、1937年にオレブロ・ミッションを設立しました。ですから、ペンテコステ的経験は宣教師の来日以前のオレブロ・ミッション諸教会にあったと思われます。また、ペンテコステ的経験が**世界宣教へのエネルギー**であったと思われます。

日本福音教会における聖霊経験の広がり、今世紀中期からのアメリカやカナダからの**「聖霊カリスマのチーム」**によってさかんなものとなっていきました。単なる経験のみではなく、聖霊と経験についての**バランスのとれた教え**が特徴としてありました。**聖公会のデニス・ベネットの「朝の九時」**や**「聖霊とあなた」**はよく読まれました。

オレブロ・ミッションもJECも、**バプテスト的な背景とバランスのとれた伝統的教理**を保ちつつ、**ペンテコステ的経験にオープンであった**という点において、「**伝統的脈絡に立ちつつ、その神学的脈絡にそうかたちでペンテコステ的経験を理解し受容する**」というカリスマ運動の特徴を明らかにしてきました。ただ聖霊運動は非常に多面的であり、簡潔に表現し位置づけることは困難です。いうなればすべての神学と実践の領域に関与しています。その神学的位置づけ等に関心のある方は、私のホームページにあります「JECアイデンティティ研究室」にある資料集をご覧ください。（参考文献：R・H・カルペッパー「カリスマ運動を考える」、他）

< 3 > 未来：JEC神学の継承・深化・発展への輪郭

ここでさらに次の50年を見渡してのJECの神学的輪郭のあり方を模索してみたいと思います。JECのあり方が、日本のキリスト教会の中において、**ひとつの意味ある選択（オプション）**として評価され、市民権を獲得しうるかたちに成熟していくためには、一体どのような神学的特質に特色づけられている必要があるのでしょうか。

その第一は、**真に聖書的、福音的であること**です。“**聖書的適格性**”が絶えず自己吟味されていく必要があります。

第二に、分派的、自己流であってははいけません。**常に公教會的であることが大切**です。あらゆるところで、常に、すべてによって信じられてきた“**正統信仰の公同性**”を反映するものでなければなりません。

第三に、“**現代的適応性**”と**四つに取り組むもの**でなければなりません。聖書の使信の高さ・深さ・広さを特定の文化言語と思维様式において積極的に立証することを不可避の機能として担うことが必要です。オウム返しに語るのみではなく、新しく語らねばなりません。単に要約するのみでなく、新しく理解されなければならないのです。

第四に、“**自己革新性**”を**不可欠の属性としてもつもの**でなければなりません。改革された教会は常に改革され続けなければなりません。さらに「**非批判的伝統主義**」に対して、キリスト教有神論というパラダイムに立った批判的学問性が必要とされています。宗教者一般によく見受けられる主観、熱狂、独善のみでなく、客観的、学問的脈絡が求められているのです。（参考資料：宇田進「日本の福音主義神学に未来はあるか」、他）

最後に、「**これらの四つの特質を保ちつつ、JECのルーツとアイデンティティの脈絡にかなう神学のあり方を示すものにはどのようなものがあるのか。**」と問わねばなりません。

私はそれにかなう神学のひとつとして、“**ミラード・J・エリクソンの神学著作集**”を推薦できると思います。エリクソンは、**私たちと同じルーツのスウェーデン・バプテスト系のクリスチャン**です。彼は**バプテストと福音主義の遺産に忠実**でありつつ、上記の**四つの特質を宿す神学者**です。「**牧会者のハートと学者の知性**」をもつ**神学者**とも言われます。

彼の著書は「**組織神学の傑作**」と評価され、現在のアメリカのキリスト教大学や神学校で**教派を越えて「基準書**」として用いられています。実際読んでみての感想は、「**多くの神学書は概念的であり“電話帳”を読んでいるような印象をもちますが、エリクソンの著書は魂のこもった“讚美歌”を歌っているようなのです。**」ただ紙面が限られていますので、ここで詳しい紹介はできません。このエリクソン著作集をテキストにしました講義レジュメと講義テープは、山崎チャペル内“**一宮基督教研究所**”にありますので、必要な方はご連絡ください。またインターネットを通して「**電子メール講義**」を毎日配信していますのでご利用ください。（参考文献：ミラード・J・エリクソン「キリスト教神学入門」、他）

< 結び >

以上、JECの過去・現在を振り返りつつ、次の50年間における神学のあり方をひとつの試案として模索してみました。私は来世紀におけるJECの神学のあり方・方向性というものを真剣に考慮していくとき、“ミラード・J・エリクソンの神学”を無視することはできないと思います。

私の提案としてですが、「エリクソンの神学をJECの“神学的座標軸”と位置づけ、その下にJECの過去と現在の霊的遺産を適切に整理し、そして今後展開していくであろう種々のムーブメントを適切に関係づける」というかたちで、JECの流れの中でのよきものを継承・深化・発展させていく軌道を敷設することができると思います。

このような堅実な神学的作業を通してJECは、明確な聖書的適格性・正統的公同性を有する神学的ルーツ・アイデンティを自己確認する群れ、現代的適応性・自己革新性という神学的な意味での“未来展開可能な枠組み”を形作る群れ、宣教のパトス（情熱）と神学のロゴス（論理）の両輪を駆動させる群れ、そして保守福音派とカリスマ福音派の“架け橋的な位置”においてユニークな貢献をなす群れ、としてたゆむことなく前進し続けると思います。

[このページで「つながりにくいリンク」がありましたら、お知らせください。](#)

感想、質問、登録、注文、コピー・印刷、資料代金・支援献金窓口

気軽に[下記のアドレス](#)までメールをお寄せください。あなたのメールをお待ちしています。このホームページの資料をプリントアウト、そして再コピーされる場合は、それぞれ与えられた恵みに従って「ICI支援献金」をしていただけたら感謝です。

安黒務：郵便振替口座番号：01110-0-15025 加入者名：一宮基督教研究所

J E C の源流と歴史的遺産 1

- 三つの要素と J E C -

一宮基督教研究所 安黒務

J E C 理解の鍵

日本福音教会 (J E C) は、英語でジャパン・エバンジェリカル・チャーチーズと表現されます。「日本」と「教会」の部分は分かりやすいのですが中心にある「福音(エバンジェリカル)」という部分はあまり理解されていません。しかし、この部分を正しく理解することこそが J E C 理解の鍵なのです。

J E C の全体像

目の見えない三人が象の一部分を触って「象とはホースのようなものだ」「象とは柱のようなものだ」「象とはロープのようなものだ」と証言したそうです。これは正しい象の姿を表現しているのでしょうか。私は信仰者としての初期に「ウォッチマン・ニーの『キリスト者の標準』を読んだことのない人は J E C のメンバーと認めたくありません。」と聞かされて「 J E C とは十字架のメッセージの群れなのか?」、聖霊カリスマ・セミナーで聖霊のバプテスマ(もしくは満たし)の経験すると「 J E C とはカリスマ的な群れなのか?」、スウェーデン宣教師の背景はスウェーデン・バプテスト諸教会と知ると「 J E C とはバプテストの流れなのか?」等々。私の J E C 理解はその時その時に“カメレオン”の皮膚の色のように変化しました。そのような J E C の一員である私たちにとって「 J E C 」の一部だけではなく、その全体像を知るとはとても大切なことです。私は J E C の全体像を理解するためのキーワードは「エバンジェリカル」であると思います。そこで、日本福音教会の名称の中心部分にある「福音(エバンジェリカル)」について十二回に分けて解説させていただきます。

エバンジェリカルの意味

私は「福音(エバンジェリカル)」という意味には「イエス・キリストの死・葬り・復活の福音を単純に信じる」という素朴な意味と、「福音主義神学に立つ」という神学的な意味があると思います。私は K B I で「福音主義神学」という科目を担当しています。それは「福音主義キリスト教と福音派」(宇田進著)を基本テキストとして「神学生一人一人の所属教派の信仰の源流と歴史的遺産を探求する」ことを課題にしています。そこで教えられてきたことは、 J E C とは二千年の教会史において幾重もの発展や発達過程を経て生成を見るに至った生きた実

体であるということです。

三つの重要な要素

それでは、二千年の教会史における「JECの源流と歴史的遺産」を以下の三つの要素に注目しつつ見てまいりましょう。まず第一に、最も根本的な要素として**神学的・教理的要素**があります。つまり、何を信じているのかの問題です。JECは「聖書信仰」に立っていると主張されますように、穏健で中庸な、バランスのとれた一定の神学的立場に立っています。第二に、**歴史的要素**があります。JECの背後には、カリスマ運動、ケズィック運動、バプテスト運動、会衆派ピューリタン運動、等々の特定の歴史的運動が存在しています。よく「現在の根は過去に深く根ざしている」とか、「教会の歴史は現在を解明する」といわれるところです。第三に、**社会的、文化的要素**があります。JECという現象は歴史における一つの社会的・文化的現象という一面を持っています。区別できるJEC独自の行動様式を分析することによって、JECの立体的な把握を得ることができます。

JECの源流と歴史的遺産 2

- 使徒的キリスト教とJEC -

一宮基督教研究所 安黒務

使徒時代から古代教会へ

今回は、「使徒時代の信仰」を忠実に継承している群れとしてのJECについてみました。今回は、「古代教会の正統信仰」とJECの関係について見てまいりましょう。

“エバンジェリカル” JEC

今回は、JECの全体像を理解する鍵が“**エバンジェリカル(福音)**”という言葉にあること、そしてJECが立っている神学は種々の特色はあるにせよ、基本的には「**福音主義神学(エバンジェリカル・セオロジー)**」であることを指摘しました。その具体的な内容を教会の2000年の歴史の中にみてまいりましょう。

使信（メッセージ）そのもの

「聖書が福音（エバンジェリカル）という場合、それはほかでもなく初代教会の使徒たちが宣べ伝えた使信（メッセージ）そのものを指しています。現代は、方法とか、成果とか、実存ということが強調され優先される時代です。しかし、ストットⁱは、ローザンヌ会議ⁱⁱの講演の中で第一世紀の使徒たちの宣教にふれ、その中で最も中心的なことは、実に方法でも成果でもなく、使信（メッセージ）そのものであったと語って注目されました。では、**使徒たちが宣べ伝えた福音**とは何であったのでしょうか。ひとことで表現するならば、ピリポがエチオピアの宦官に『**イエスのこと**を宣べ伝えた』（使徒 8:35）とあるように、イエスであったと言えるでしょう。ⁱⁱⁱ」私たち JEC は、その時代その時代の様々なムーブメントにオープンな態度をとり、そのすぐれた方策をよいかたちで吸収することにより群れとしての成長を遂げてきました。また、今後ともそのようにして成長を遂げていくことでしょう。しかし、私たち **JEC の不変の本質** はエバンジェリカルとしての本質であり、使徒たちが宣べ伝えた使信（メッセージ）そのものであることを見失ってはならないと思います。

主イエスこそ福音そのもの

では、そのイエスを使徒たちは実際にどのように提示したのでしょうか。以前、共立基督教研究所で学びましたときの奥山実師の伝道学のノートには、どの程度詳しく語るかという伝道の五つのレベルについての記述があります。「**神の国**（創造主なる主、愛と義の神、救い主、信仰、...）使徒 20:25,27。 **神に対する悔い改めと主イエスに対する信仰** 使徒 20:21。 **キリストの十字架と復活** コリント 15:3,4。 **十字架につけられたキリスト** コリント 1:23。

主イエスそのもの ルカ 23:42,43 使徒 8:35, 16:30-31。時間を長くかけられるときは、聖書の教えを余すところなく語れますが、ここ一番という言う時には、**一言で福音**を提示しました。つまり、**イエス・キリストご自身**を最前面に出しました。**主イエス**こそ福音そのものです。人間の運命は主イエスに対してどうするかで決定されます。受け入れますと永遠の祝福へ、拒みますと永遠の滅びなのです。老人伝道、臨終伝道においては第五番目の最もシンプルなかたちでの福音の提示が大切です。^{iv}」私も救われた当初は滝元明師の「神・罪・救い」の**シンプルで情熱的なメッセージ**にひきつけられました。そして信仰生活の歩みの中で聖書の真理の深みと豊かさを少しずつ理解できるようになっていきました。JECには福音への素朴で単純な信仰とともにその深みと豊かさを探求する信仰の両面のバランスがあると思います。

福音の五つの基本的要素

ストットは、使徒たちの福音の提示についてもう少し詳しく述べており、
福音の事実（キリストの死・葬り・復活）、**福音に関する証言**（旧約聖書・新約の目撃者）、**福音に関する確信に満ちた主張**（生ける救い主の現実）、**福音の約束**（罪の赦し・聖霊による新しい生命）、**福音の要求**（悔い改め・信仰・バプテスマ）をあげています。

割引も水増しもせず

以上が使徒的福音の骨格です。J E C がエバンジェリカルであるということは、
以上のような**使徒的福音を割引も水増しもせず**忠実に継承するというにほ
かなりません。

J E C の源流と歴史的遺産 3

- 古代教会の正統信仰と J E C -

一宮基督教研究所 安黒務

使徒時代から古代教会へ

前回は、「使徒時代の信仰」を忠実に継承している群れとしての J E C について
みました。今回は、「古代教会の正統信仰」と J E C の関係についてみてまい
りましょう。

信仰心か、信仰の対象か

日本人のカミ観は本居宣長の「**何にまれ、尋常(よのつね)ならず、すぐれたる徳のありて、可畏(かしこ)きものをカミとはいうなり**」に代表される「雷、竜、樹霊、狐、そして山も海もカミになってしまう」もので、**信仰の対象より信仰心を大切なもの**と考えてきました。それに対して、キリスト教会はその初めから「**対象としての信仰**」を「**態度としての信仰**」に優先させてきました。たとえば、結婚について考えてみますと、ある女性が結婚したいと思います。「結婚したい」これには間違いはありませんが、結婚という重大な問題を考えると、いろいろと条件が必要になってくるものです。だれでもまず考えることは、変わりなく愛してくれるだろうか？次に、生活能力はあるだろうか？さらに真実な人か？学歴は？家柄は？顔かたちは？といろいろと考え、この人ならば生涯をまかせることができるかと心を決めると、結婚することになるのです。どんな人であっても、「私

はもう婚期が過ぎたから、とにかく結婚したい。もう相手がどうのこうのとは言っておれない。愛してくれなくても、生活能力がなくても、対象なんて問題ではありません。」さらに「対象なんてなんでもかまわない。結婚さえできれば、それがたとえ、狐であろうが、豚であろうが」などと言う人はひとりもいないと思います^{vi}。信仰も同じことです、**対象こそ第一のもの**です。

神秘主義的信仰ではなく、信仰告白的信仰

そのような意味でキリスト教信仰は、「鰯の頭のようにつまらないものでも、それを信仰する人には尊く、神仏同様の靈験をもつに至る」といった**神秘主義的な信仰**ではなく、最初から明確な対象への**信仰告白的信仰**であると言われます(例：申命記 6:4 「聞きなさい。イスラエル。主は私たちの神。主はただひとりである。」、マタイ 16:16 シモン・ペテロが答えて言った。「あなたは、生ける神の御子キリストです。」。一世紀の教会においては、「使徒たちの教え」(使徒2:42)「伝えられた教え」(ローマ6:17)、「聞いた健全なことば」(テモテ1:13,14)などと呼ばれている一定のまとまった信仰箇条のようなものがあり、それが**宣教と教会形成の基盤、土台**となっていました。さらに、教会はその最初から**異端に対して正統的信仰を弁証**しなければなりません(ガラテヤ、コロサイ、ヨハネの各書参照)。

教会内に組織神学的活動始まる

以上のような要素を背景として、特に二世紀頃から教会内に組織神学的な活動が始まり、同時に信条というものが発達していきました。その最古の例が、使徒信条と酷似し、当時の教会の基本的教理を反映しているものと考えられている「**古ローマ信条**」です。これは二世紀にローマの教会が持っていた信仰告白文であったとみられています。初期の宣教と厳しい迫害の時代を経て、四世紀には念願の信仰の自由を獲得しますが、一方で異端説も活発となり、一連の教会会議を開催し、**使徒信条**を含め、**ニカイア・コンスタンティノポリス信条、カルケドン信条、アタナシオス信条の四つの公同信条**を公にしました^{vii}。

公同信条の内容

これらの四つの公同信条に共通しているもっとも根本的な信仰の事柄とは何でしょうか。それは**三位一体の神観とキリストの神・人二性論**および彼による**贖罪のわざ**です。信条といいますとどこか難しい印象をもちますが、「イエス・キリストの人格とみわざ」について聖書の教えを簡潔にまとめたもので、要点的で短く分かりやすいものです。古代教会のクリスチャンたちは「父なる神と御子イエス・キリストの関係について、またイエス・キリストは神なのか、人なのか」

といった課題と格闘し、**聖書の啓示が明らかにしている輪郭**を明らかにしていきました。これらの公同信条は、ローマ・カトリック系、ギリシャ正教系、プロテスタント系の諸教会で受け入れられており、「**世界信条**」とも呼ばれています。使徒信条を礼拝で唱和するとき、「**この信条は世界のすべてのクリスチャンの共通の告白なのだ!**」と確認するだけでもキリストのからだ意識が全世界に広がり、さらに恵まれます。

あらゆるところで、常に、すべてによって

以上、異端との戦いの中で、聖書の啓示に根ざして**異端と正統との限界線**を明らかにしてきた歴史を振り返りました。このようにして「あらゆるところで(公同性)、常に(古代性)、すべてによって(一致同意)信じられてきた」正統信仰の根幹が確立されていきました。JECはエバンジェリカルの一員として、この正統信仰を基本としている群れです。それゆえ、エバンジェリカルとしてのJECは、日本と世界における宣教協力の前進のために**分派的、自己流のあり方ではなく**、常に公同的なあり方を探求していくべきです。「十字架と聖霊」というJECの特色を保持しつつ、常に「**正統信仰の公同性**」を反映させようという意識の中で前進していくべきなのです。

JECの源流と歴史的遺産 4

宗教改革の三大原理とJEC

一宮基督教研究所 安黒務

古代教会から宗教改革へ

前回は、「三位一体論」や「キリストの神人二性一人格論」といった“あらゆるところで”、“常に”、“すべてによって”信じられてきた「古代教会の正統信仰」、つまり**正統的かつ公同的な教理**を基本とするJECについてみました。今回は、中世のローマ・カトリックの時代を背景にして、当初は内部改革として起こりました「16世紀の宗教改革運動^{viii}」とJECの関係についてみてまいりましょう。

聖書のみ

1521年4月18日、ルターはヴォルムスの国会で聖書に対するみずからの確信を次のように披瀝して注目を浴びました。「私は聖書のあかし、また

はその明白な理由から確信せしめられるのでなければ。というのは、私は教皇も宗教会議も信じない。それらはしばしば誤りを犯し、自己矛盾をきたしていることは明らかなことである。 **私の良心は神のことばに捕らえられている!**」当時のカトリック教会において信仰に関する最高の権威は事実上教皇を中心とする教会でした。これに対し、ルターは神のことばである「**聖書のみ**」が**最高の権威**であると主張したのでした。

「彼ら改革者たちのキリスト教理解の全体は、この“聖書のみ”の原理に依拠していました。すなわち、彼らにとって聖書はこの世界における**唯一の神のことば**であり、個人と教会の**唯一の指導者**であり、真の神とその恵みを知るための**唯一の源泉**であり、過去・現在を通して教会のあかしと教えとをチェックする**唯一の資格ある審判者**でした。」

「聖書 + 伝承」とするカトリックや「聖書を単に歴史的宗教的文書のひとつ」とみるリベラルな見方に対して、**ルターのような聖書観**は、エバンジェリカルとしてのJECの根本的確信です。

信仰義認

カトリック教会の「**信仰 + 善行**」の主張によりますと、人間の側の状態いかによって、義認は変化もし動揺もするということです。このような考え方は、義認の一次的完結性と救いの確かさの喪失に帰着し、カトリックの信仰者は「救いの確信」を持つことはできないといわれています。

かつてルターは次のように言明しました。信仰義認の教理は「すべての教理を支配する主であり王です。」**キリスト教における根本的な問題は罪人がいかにして神に義と認められ、神との正しい関係に入ることができるか**ということ。これに対する聖書の一貫した答えは「恵みのみ」、「キリストのみ」、「信仰のみ」ロマ3:24、ガラ2:16 によるということ。す。

JECの聖会やキャンプでは、ウォッチマン・ニーの「**キリスト者の標準**」にある「**キリストの血**^{ix}」のメッセージがよく語られました。姦淫と殺人の罪を犯したダビデが「不法を赦され、罪をおおわれた人たちは、幸いである。」ロマ4:5-8と告白しましたように、何の働きもない、不敬虔な私たちも、出エジプトの過ぎ越しの時のように、神の子羊なる「**キリストの贖いの血**」によっておおわれ、罪赦された者なのです。

聖徒の交わりとしての教会

ホッジという神学者は、カトリック教会を「キリストの代理としての**ローマ教皇に服従する**外形的社会」と言っています。つまり、カトリックの教会観の中心をなしているものは、結局**教皇を頂点とする聖職位階制**であり、神

の民とか信者の集りということはみなそれに従属するものにすぎません。

改革者たちの教会観に共通していたものは、「**キリスト者の会衆また集会**」としての教会という信仰でした。ルターは、第一に、当時特権的位置を占めていた聖職階級に対して、信仰者はすべて神の御前に**祭司**であること。第二に、カトリック教会の靈的階級性に対して、信仰者はすべて**平等**に神に接することができること。第三に、当時の聖俗という優劣の考え方を否定し、靴屋であれ、鍛冶屋であれ、農夫であれ、人間の職業はすべて**神より召された職域**であること。以上の三つの点を強調しました。

JECは教会政治のあり方として「**会衆制**」をとっています。エリクソンという神学者は、このあり方は「**万人祭司制の教理の実践として最も聖書的である^x**」と語っています。

宗教改革の子孫としてのJEC

以上、宗教改革の三大原理を概観しました。「聖書のみ」「信仰義認（キリストのみ）」「聖徒の交わりとしての教会（万人祭司）」は、それぞれ**客観的・主体的・社会的要素**と呼ばれ、それらはプロテスタントの三大原理と見られています。エバンジェリカルとしてのJECは、この三大原理を忠実に継承しているゆえに、**宗教改革の子孫**なのです。

JECの源流と歴史的遺産 5

宗教改革における四つの流れとJEC

一宮基督教研究所 安黒務

宗教改革から近世へ

今回は、「16世紀の宗教改革運動」の子孫としてのJECをみました。今回は、その発展過程の中で生み出された次の四つの流れ（あるいは信仰類型とも言える）^{xi}とJECの関係をひもといてみましょう。

宗教改革における四つの流れ

ルター派：ルター派は前回ふれましたマルティン・ルターと、協力者メラニトンを中心に、ドイツから広がっていった流れで、信仰義認の教理を中心に据えた「**救済論的**」また「**キリスト論的**」な神学に特徴があります。

カルヴァン派：ルターに次いで登場してきたのがツウィングリとジャン・

カルヴァンです。改革派とか長老派として知られているスイスを中心として広がっていった流れで、聖書論を基盤にした「有神論的」また「包括的・体系的」な神学に特徴があります^{xii}。アナバプテスト派：第三の流れは、1523年にスイスのチューリッヒを中心として始まりましたアナバプテスト派と呼ばれている流れで、初代教会への復帰と復元を目指す「原初主義」に特徴があります。英国のプロテスタント：第四の流れは、1533年にカトリックから独立した英国のプロテスタントです。英国国教会は、カトリックからプロテスタント(カルヴァン主義)との間を揺れ動いた後、儀式ではカトリック、信仰ではプロテスタントという“中道、中間の立場”に落ち着きました。しかし、その中途半端な改革に異議を唱える人々によって新たな教派が生まれていきました。

JECの信仰は、ルター派のように「信仰義認」を中心にしており、カルヴァン派のように「包括的・体系的」な組織神学を大切にしており、アナバプテスト派のように「初代教会のあり方」を貴重なものと考えています。それぞれの流れの良き特徴を吸収し内に含んでいますが、歴史的に直接のつながりは英国における宗教改革にあります。

会衆派ピューリタン：会衆派としてのJECのルーツ

バプテスト教会は、英国における宗教改革の運動の中から生まれました。英国における宗教改革は政治的理由(上からの改革)によって始まったために、教会内において改革運動が起こり、それがいわゆるピューリタンの運動として大きく発展しました。そのピューリタンは三つのグループに分けて考えることができます。第一は国教会ピューリタン、第二は長老派ピューリタン、第三は会衆派ピューリタンです。この会衆派ピューリタンは、礼典だけの改革に満足せず、会衆政治によって教会を改革しようとしてきました。

JECが教会政治のあり方として「会衆制」をとっていることの歴史的ルーツはここにあります。

バプテスト教会の礎：バプテストとしてのJECのルーツ

やがて英国国教会から離れて教会をつくらうという運動が起こり、「三つの原則」- 信徒は自由意志に基づいて教会の会員となる(自発に基づく原則)、教会役員は会員によって選ばれる(会衆制)、どの集会も、他の集会の上には権威を振るってはならない(地方教会の独立自治)が明らかにされ、やがて「明確に新生した者のみに、浸礼のバプテストマを授ける」バプテスト教会の礎が築かれていくこととなりました。

JECがスウェーデン宣教師から継承し、“空気のように”自然なかたちで

受けとめている「**教会観**(教会はどうあるべきかについての考え方)」の歴史的ルーツはここにあります。(このバプテストの信仰は、後にアメリカ全土に広がり、政教分離、信仰の自由、個人の尊重といった信仰も広く受け入れられ、今日では二千万人を超えるアメリカ随一の教派となっています。)

スウェーデン・バプテスト教会の始まり

1835年、**ニールソン**という一人のスウェーデン人の船員が、激しい台風に苦しめられながらニューヨークに着きました。死と神の裁きについて深く考えさせられた彼は、上陸するとただちに教会を訪ね、そこで福音を聞き回心しました。回心後、彼は熱心に伝道を始め、特にスウェーデンからの移民に伝道しました。その後スウェーデンに帰ってホーランドで**スウェーデン最初のバプテスト教会**を設立し、その教会の牧師となりました。

スウェーデン・バプテスト教会の幅広い体質はJECの中にも

スウェーデン・バプテスト教会の流れは、信仰的には**敬虔主義的なバプテストの信仰**の特質を主流とし、神学的には**穏健なカルヴァン主義**に立つ者が多いのですが、アルミニウスの信仰の流れをくむ者も少なくありません。排他的ではなく、聖書信仰にたちながら他との協力を大切にしています^{xiii}。

カルヴァン主義では「**神の主権**」という概念を中心に神学の体系的整合性を大切にする特徴があり、それが「**予定論**」を結実させています。それに対して、アルミニウスは「**人間の自由意志**」を重視して予定論を修正しようしました。しかし、ラムという神学者は「その相違点は、実際に両者が主張しあっていたほど大きくはなかったというのが実情ではなかろうか。**神は常に神学よりも大きいし、聖書は私たちの組織的成文化よりもずっと豊かで大きい。**」と総括しています。スウェーデン・バプテスト教会の**ふところの深い、幅広い体質**は、オレプロ・ミッションを通してJECの中にも受け継がれています。

J E C の源流と歴史的遺産 6

16, 17世紀の信条とJ E C

一宮基督教研究所 安黒務

16、17世紀における信条の出現とJ E C

今回は、「近世の四つの流れ」の中で会衆派ピューリタンからバプテスト派が生まれてくる経過をみました。今回は、宗教改革の発展過程の中で生み出されてきた「信条」の出現とJ E Cの関係を考えてみましょう。

プロテスタント教会の信条^{xiv}：プロテスタントとしてのJ E Cの自覚

信条の出現は宗教改革の特徴的現象であって、時代的に見れば、16世紀の宗教改革とそれに続く17世紀の正統主義の時期に生まれました。代表的な信条を教派別にみますと、**ルター派では**、ルターの大・小教理問答、アウグスブルク信仰告白、アウグスブルク信仰告白の弁証、シュマルカルデン条項、和協信条；**改革派では**、ジュネーブ信仰問答、チューリッヒ一致信条、フランス信条、スコットランド信条、ベルギー信条、第二スイス信条、ハイデルベルク信仰問答、ウエストミンスター信仰告白、ウエストミンスター大・小教理問答；**英国教会では**、39箇条(聖公会大綱)；**バプテスト派では**、スタンダード信仰告白、第二ロンドン信仰告白；**会衆派では**、サヴォイ宣言などがあります。

当時の教会は、さきに記述してきました**共同信条**、**教父たちのよき実**、**中世神学のよき部分**、そして何よりも**聖書そのもの**を綿密に調べながら作成にあたりました。これらの信条の邦訳は、『信条集』前編・後編と、『バプテストの信仰告白』等に収録されていますので、読まれますと必ず“**プロテスタントの一員としてのJ E C**”の自覚を養う上で大きな益を受けられます。教職者や信徒リーダーの方には少なくとも上記の一冊は読んでいただきたいと思います。

信条の意味・意義：プロテスタントとしてのJ E Cの信仰の根源

これらの諸信条は一部の教派の歴史的遺産という以上に、“**プロテスタントとしての信仰の根源**”に深く根ざしたものであることが分かります。第一に、プロテスタントとは、ルターの生涯に見ますように「**わたしはここに立**

つ」とはっきり自分の信仰を告白し表明する者です。信条はまさにその**信仰の内容を定義しているもの**です。キリスト教は決して漠然としたあいまいな感情や満足感や悟りの境地というようなものではありません。第二に、歴史の中には、経験を過度に重視したり、聖書のあるテキストだけを一方的に強調するいわゆる“一節主義”に走ったりして主観主義に陥った例が多くあります。信条は、自分自身の、そして私たちの教会の信仰と生活が**共同の教会の信仰と生活に立っているかどうか**をチェックするための規準、正統と異端とを区別するための規範です。第三に、信条は**キリスト教宣教と教育の素材**を提供するものです。宣教には人々に伝える客観的なメッセージと、入会に際して何が要求され、何を与えるかを明示することが必要です。教育においても、教会は教えるべき真理と教会の所信をはっきりと持っていなければなりません。第四に、信条は**教会の一致と協力をはかる上での基盤**です。教会が一致協力のための努力をなす際に、いわゆる状況主義ではだめで、つねに真理における一致(ヨハネ17章)が基本とならなければなりません。

JECの私たちは歴史的な**信条を読み、それに養われることを通して**、プロテスタントの信仰の根源に触れ、共同の教会の信仰と生活に立っていることを確認し、宣教と教育の素材という歴史的遺産を継承し、教理的基盤を識別しつつ超教派の教会協力を推進していくことが大切です。

バプテスト派の特質を宿す群れとしてのJEC

ここで、JECのルーツとしての「**バプテスト派の信条の特色^{xv}**」について述べたいと思います。「はじめに信条ありき」で、信条を承認する信仰者のみを受け入れる信条主義の教会のあり方に対し、信仰者個人の主体性を重んじるバプテスト派では「**集まった信仰者によって**」信条や教会が形成されます。聖書全体を詳細に網羅した信条によって表現しようとする「信条主義」に対して、バプテスト派は聖書自身で十全なので、主要なポイントだけをあげる「**簡易信条主義**」の立場をとっています。信条は永続的なものではなく、自由に信条を「**作成したり、変更したり**」することができます。そしてかなり広い立場の枠を作り、その中での個人の自由が許されています。

信仰告白における「**個人の主体性**」が強調されています。「教会の信仰告白」よりも「個人の信仰告白」が、また「教派の信仰告白」よりも「個々の教会の信仰告白」が優先されます。「**個人の自由、地方教会の独立自治を拘束する信条を認めません。**」

これは、カトリックを背景とします英国教会(聖公会)の「組織による上からの支配」、また先行した宗教改革運動であるルター派や改革派の「詳細に網羅された信条による束縛」を嫌ったバプテスト派の動きを読み取ることがで

きます。バプテスト派は「**個人の主体性**」をきわめて重視し、それに価値を置く群れです。JECには「簡易信条」があり、それは宣教団体から継承したものです。このように信条のもつ意味や意義、そして私たちのルーツとしてのバプテスト派の特質を学びますと、JECとはまさしく“**バプテスト派の特質**”を宿す群れであると確信させられます。もちろん、JECの教会観では「**独立相互依存**」がうたっており、個々の教会の「**主体性の尊重**」とともに、JEC全体としての「**一致と調和**」が強調されており、この二つの要素の美しいバランスこそがJECの特色であると思います。

JECの源流と歴史的遺産 7

17世紀の正統主義神学とJEC

一宮基督教研究所 安黒務

17世紀の正統主義神学とJEC

今回は、「信条」がプロテスタントとしてのJECの信仰の根源を表現するものでもあることをみました。今回は、17世紀に登場した多くの神学的著作とJECの関係を考えてみましょう。

宗教改革の果実の組織化・体系化

キリスト教神学史上、この17世紀は、普通、プロテスタント正統主義の時代と呼ばれています。この時期に宗教改革の数々の果実が**一つの神学的体系に組織化**されることになりました。その結果成立を見るに至った神学は、それ以後のあらゆるプロテスタント神学にとって**規準的**なもの、あるいは**起点**とみられるところから、“**正統的**”(orthodox)と呼ばれるようになりました。

JECの神学体系の基本的根幹のルーツはここに

正統主義神学について基本的な点を確認しておきますと、第一に、この時代の神学的文書を無批判に、また、置かれていたその歴史的状況から切り離して読むべきではありません。しかし、第二に、これらの神学的文書は、プロテスタント・キリスト教の組織的な解説の“**オリジナル版**”を提供しているという事実を忘れてはなりません。この意味において、所属教派のいかに問わず、いかなる教派のキリスト者も看過することの許されない世界であると言えます。第三に、用いた当時の方法論について今日いろいろとされていますが、17世紀の神学者た

ちは、**歴史的な意義を有する重要な文書資料**はすべてあっています、宗教改革者たちに一番近くあった者たちとして、**改革者たちの語ったことを保存**するとともに、それをできる限り**正確に再生復元**しようと努めました、驚くべき熱心さと徹底さを持って**聖書そのもの**を調べ、できる限り**正確かつ忠実に聖書の教えを系統立てて**捉えようと努めました。第四に、今日の福音派にとって、そしてJECにとっての**福音主義神学の基本的根幹**の多くは、この時代の神学にそのルーツを見出すのです^{xvi}。

今は亡きスウェーデンの推奨されたルイス・ベルコフの「組織神学」、高橋昭市師の教えてくださったヘンリー・シーセンの「組織神学」、そして現在用いられていますミラード・エリクソンの「キリスト教神学」のルーツもここにあります。

17世紀正統主義神学とJEC神学との連続性

アメリカ福音派の神学の発展において、きわめて重要な位置を占めているのが“**古プリンストン神学**”です。その母体となったプリンストン神学校の初期において、17世紀正統主義神学の時代の**トゥレティーニの『組織神学』**全三巻が教科書として使われていました。そして、当時同校の組織神学教授でありました**チャールズ・ホッジの『組織神学』**全三巻(1871-72年)と、ホッジをもとにして書かれたバプテスト派の**オーガスタス・ストロングの『組織神学』**(1907年)を通して、トゥレティーニの神学思想はアメリカ福音派の中に広く伝わっていったのでした。私たちは、17世紀のプロテスタント正統主義と近代の福音派の神学、そしてスウェーデン・バプテストを経て継承されているJECの神学との**連続性**をはっきりと認識する必要があります。

ホッジなかりせば、全く異なった形をとったかも

ここで、ホッジについて紹介させていただきます。ホッジは卒業後わずか三年目の1822年、敬愛する恩師と並んでプリンストン神学校の教授陣に加わりました。のちにはもっと榮譽ある椅子から、彼はアメリカの教会を**アメリカのトゥレティーニのように**眺め渡しました。彼が**講義を続けた40年間**に、三千人以上の学生を通して、長老派および他の教派の中へ、またアメリカ国内、および世界の遠隔地にまでもたらされました。さらに『**プリンストン・レビュー**』誌のぎっしりつまった頁を通して、それ以外の数え切れない多くの人々に、その教説は届きました。ホッジは「**アメリカの生んだ最も偉大な神学者**」であるという評価は少し熱烈すぎるかもしれませんが、しかし**ホッジなかりせば**、アメリカの長老主義とアメリカのカルヴァン主義は、**全く異なった形をとったかもしれない**、というダンホフの言葉はたいして誤ってはいないのです^{xvii}。

旅行の道具としての**コンパスにおける小さな誤差**は、私たちが長い距離を旅したとき、かけ離れた場所に進んでしまうことにもなりかねません。いみじくも、ある神学者はこのように申しました「政治は神学の次に男らしい仕事である」と、つまり神学に取り組むことこそ、この世界で**最も男らしい仕事**なのだ。バプテストの流れでは、伝道と牧会の現場での実績が働き人に対する評価の物差しになる傾向があります。しかし、群れの将来のあり方を左右しうる神学のあり方に日夜没頭している神学者たちへの適切な評価と支援もまた、主の働きの重要な部分なのです。

J E C の、そして福音派全体にとって基準的な組織神学書

最近、光栄なことに「いのちのことば社」から委託されて一冊の組織神学書を翻訳させていただきました。それは、**J E C の、そして福音派全体にとって基準的な組織神学書**と高く評価されています**ミラード・J・エリクソンの「キリスト教神学」**で、トゥレティーニ ホッジ ストロング エリクソンという連続性の中でみることのできるものです。

今日の福音派における卓越した指導者のひとりである J . I . パッカーは以下の書評を寄せています。「過去 10 年の間、ミラード・エリクソンの『キリスト教神学』は、それ自身でキリスト教の真理についての現代のプロテスタントの概要の、**最も広範に用いられ、最も一般的に役に立つもの**として実証されてきました。強靱な福音主義者で本質的に保守的、一貫して現代的で確固たるバプテスト、穏健カルヴァン主義者で慎重な大患難後再臨説・前千年王国説に立ち、選択肢に対しては偏見をもたず、広範な態度をたずさえ、詳細かつ正確に分析する能力は、『キリスト教神学』に対しての**一貫した賞賛**を勝ち取ってきました。**学生の教科書**として、**牧師と信徒リーダーの資料**としての有益さはさらに豊かなものとなっています。要するに、『キリスト教神学』は**名匠のたくみのわざ**なのです。^{xviii}」

J E C の必読書、最良の組織神学書、通読を推奨される書籍

J E C は非常に恵まれた群れだと思います。それは、糸の切れた凧のようにムーブメントの風に吹きあおられる群れではなく、烏合の衆のように集められ、献金と人数を誇る群れでもなく、明確な**神学的座標軸**を宿し、**歴史的な輪郭**を描くことのできる内容豊かな、高貴な群れであるからです。今後、J E C の教職者や信徒リーダーの方々がエリクソンの「キリスト教神学」を読んでくださり、その価値を認め、J E C の**必読書**(ドッカーリー)、**最良の組織神学書**(チェイニー)、**通読の時間をとるように推奨される書籍**(ブッシュ)として未永く愛好されていくことを願っています。ちなみに、「キリスト教神学」第一巻は、2003年3月のエリクソン来日に合わせて出版される予定です。

J E Cの源流と歴史的遺産 8

敬虔主義の遺産とJ E C

一宮基督教研究所 安黒務

敬虔主義の遺産とJ E C

前回は、17世紀に登場した正統主義神学との連続性をもつJ E Cの神学についてみました。今回は、敬虔主義の遺産とJ E Cの関係を考えてみましょう。

敬虔主義運動の特色的な遺産^{xix}

日本のキリスト教が、敬虔主義的、信仰復興運動的性格をもつものであることは、歴史的に自明の事実です。主だった敬虔主義運動には、**ヨーロッパ大陸のルター派・改革派内における霊的刷新運動**：シュペーナー、ツインゼンドルフ、ハレスビー、ブルムハルト父子、**ピューリタニズム**：バンヤン、パーキンス、エイムズ、**近代の福音的信仰覚醒運動**：エドワーズ、ケアリ、スポルジョン、ムーディ、ミューラー、**19世紀以降の聖霊派運動**：フィニー、マーレー、シンプソン、マイヤー、トーレー、ニー等があげられます。これらの人々の名前のうちの幾つかは耳にしたことがあるのではないのでしょうか。私も信仰生活の初期にそれらの信仰良書を薦められてよく読み、深く感動させられたものでした。敬虔主義運動における特色的な遺産とは、**頭だけの信仰**ではなく、人間の全存在の中心である**心でしっかりと受けとめられた信仰**ということであり、聞いた真理は生活とならなければならない、正しい教理“**orthodoxy**”は正しい生活実践“**orthopraxis**”を伴わなければならない、ということでした。上記の人々のすべてを取り上げることはできませんので、ここではJ E Cに直接関係のある運動、人物、著作を取り上げて分析・評価していきたいと思います。

ウォッチマン・ニーの「キリスト者の標準^{xx}」

私たちが洗礼を受けましたときに、教会からいただきました受洗記念のプレゼントはウォッチマン・ニーの「**キリスト者の標準**」でした。それは、**J E Cの福音理解**（私たちがクリスチャン生活との関わりの中で、十字架の恵みと聖霊の働きをどのように理解しているのか）を簡潔明瞭に表現したものでした。ある集会で、おそらくJ E C伝道師セミナーであったと思いますが、J E C古参の先生が「『キリスト者の標準』を読んだことのない人は、J E C

の教職者と認めたくありません。」と語られるほどでした。その頃は、スウェーデン・オレプロミッションの宣教師たちによって形成された諸教会が「日本福音教会」として自立していく時期で、そのアイデンティティが明確にされていっていた時期でした。そのような時期において、ある種の「ウォッチマン・ニー」ブームというものがあり、彼の著作を読むことが薦められ、私たちは大いに読みました。本棚には和書・洋書50数冊のウォッチマン・ニーの書籍がならび、辞書を片手に読んだものでした。しかし、後に、日本各地そして世界各地で、ウォッチマン・ニーの主要な後継者であるウィットネス・リーの「ローカル・チャーチ」運動が異端として大きな問題になってきました。それとともに、ウォッチマン・ニーの名前にも傷がつくかたちで、JECの中における「ウォッチマン・ニー」ブームも下火になっていきました。小さな神学者としての私の心の中には「あのときのブームは何であったのか、そして下火になったのはどこに原因があったのか。このような状況下で、JECはどのようにして十字架と聖霊のメッセージを継承していくのか。」と、あの出来事を神学的にきちんと分析し評価しておくことに重荷がありました。共立基督教研究所での学びの目的の一つがここにありました。

ウォッチマン・ニーとその著作の評価

歴史神学と組織神学の視点からみますと、ウォッチマン・ニーの著作集は「玉石混交」であると言えます。紙面の関係で神学的に細かい説明はできませんが、出版社によって見分ける方法は有効です。いのちのことば社や生ける水の川やCLCからの出版は健全です。しかし、「日本福音書房」はウィットネス・リーが指導している「ローカル・チャーチ」という異端の出版社であり読むべきではありません。ローカル・チャーチの異端性につきましては、以前JECニュースでの連載されたものがありますので、JEC本部の吉野先生にお問い合わせください。ウォッチマン・ニーの50数冊あります著作の中にも「石ころ（問題となる教え）」が含まれています。では、何が「玉（健全な教え）」なのでしょう。それは、ダナ・ロバーツ師が「ウォッチマン・ニーを理解すること^{xxi}」という研究書で明らかにしていますように、宗教改革の遺産を体系化した正統主義神学の「正統的实践」を目指した敬虔主義運動の流れとしての「ケズィック運動」のメッセージを芸術的手腕をもって整理したという点に彼の卓越した貢献があります。彼には優れた文筆の才能がありました。逆に、彼の「人間論」「教会論」「終末論」には幾つかの問題とされる教えが指摘されています。

「敬虔主義運動の遺産」を継承・深化・発展させる群れとしてのJEC

ケズィック聖会とといいますのは、英国のリゾート地のケズィックで「**クリスチャンの実践的聖潔**」を主要テーマに毎年開催されています超教派の聖会のことです。そのメッセージの特徴のひとつに「**漸進的聖化**」と「**危機的聖化**」のバランスと調和があります。JECが宣教師を通しての「**聖化のパブテスト理解**（新生したクリスチャンは、幼児が成長して成人となっていくように、次第に霊的に成長していくという漸進的理解）」と第一世代の教職者が学ばれました塩屋の神学校を通しての「**聖めの経験**（救われているが自己中心で肉的な生活から、「毛虫が蝶に変貌する」ように、クリスチャン生活における明確なある時点において危機的経験を通して聖められるという理解）」という、**危機と漸進の調和**の中で聖化を理解しているのと類似しています。ロバーツ師は「ウォッチマン・ニーの『キリスト者の標準』『キリスト者の行程』は**ケズィックの教え**の整理である。」と記述しています。実際に「キリスト者の標準」の内容は、「キリストの血：**義認**」「キリストの十字架：**聖化**」の大枠をもって始められ、**聖化のプロセス**（進歩の行程）の解説として、「知ることに」「認めることに」「自己を神にささげること」「御霊による歩み」「十字架を負うこと」という五つのステップから構成されています。ケズィック聖会の構成はといいますと、第一日は「罪」の問題が扱われ、深い罪の自覚と「**身代わりとなられたキリスト**」が説かれます。第二日はパウロ神学の核心である「**キリストとともに十字架につけられた**」ことが説かれます。第三日は人々の失敗と無能にも関わらず神の全き備えの中で無条件の「**献身**」がチャレンジされます。（義認と聖化のプロセスを経ずして献身のチャレンジなし、つまり「No crisis before Wednesday」と言われます。）第四日は「**御霊にある生活**」が説かれ、聖霊に満たされ、支配され、従順に生きることが勧められます。元々は以上の四つが主要テーマでしたが、後に神に仕え、隣人に仕える「**奉仕・宣教**」が第五のテーマとして加えられていきました^{xxii}。私がここで教えられますのは、JECがその**福音理解の核心**として保持してきた「**十字架と聖霊**」理解は、ウォッチマン・ニーの流れのものではなく、ケズィック運動に流れていたものであり、ひいては「使徒的信仰 古代教会の正統教理 宗教改革の原理 正統主義神学」の正統的实践としての「**敬虔主義運動の遺産**」であるということなのです。このような視点にたつときに、私たちJECは「ウォッチマン・ニー ウィットネス・リーの流れ」の悪しき影響から解放されて、健全な「敬虔主義運動の遺産」を継承・深化・発展させる群れとして**歴史的かつ神学的に正しいポジション**を獲得することができるのです。

J E C の源流と歴史的遺産 9

自由教会と J E C

一宮基督教研究所 安黒務

自由教会型キリスト教と J E C

今回は、「敬虔主義の遺産を継承する群れ」としての J E C をみました。今回は、今日一般的にみられる「自由教会型キリスト教」のあり方と J E C の関係を考えてみましょう。

自由教会（フリーチャーチ）型キリスト教とは

“自由教会型キリスト教”とは、**教会と国家がはっきり分離した社会において独立と自治とを有する教会**のことです。いわゆる国立教会とか国教会制度のもとでの教会と対照されるもので**目的を同じくする者の自発的共同体**としての教会、つまり「**国家による支配から自由な教会**」のことです。このような教会のあり方は、地域とか国家単位で「信仰のあり方」が決められていました当時のヨーロッパから移民した 17、18 世紀のアメリカ大陸で発展していきました。（これに対して、次回扱う予定の“自由主義神学”の自由は「リベラル」と訳され、「聖書の指導からの自由」を意味しています。）

自由教会型キリスト教の特徴と課題^{xxiii}

“自由教会型キリスト教”には以下のような特徴があります。 **「歴史的伝統からの自由」** 新世界での再出発の意識は、歴史的伝統との関係を断ち、イエス及び初代教会の教えと実践に直接つながろうとする傾向を生み出した。 **「聖書以外に信条なし」** 聖書こそ、キリスト教の起源と遺産を示す中心であり、唯一の拠り所であり、すべての事柄における絶対の権威であるとの聖書中心主義が確立されていきました。 **「自発に基づく原則」** 教会の基礎を個人による、自由で、強制を受けない同意に置くという考え方が大切にされ、そこでは政治的手腕・説得力・リーダーシップのある指導者が重要な位置を占めています。 **「魂を救うこと以外には、何の関わりも」** 自発的共同体であることの根本的特質は、個人個人の同意に基づいて、明確な目的を遂行することであり、その目的を伝道事業、すなわち福音を効果的に広めることであると定義しました。 **リバイバリズム** 教会は権力による上からの支配によってではなく、説得とアピールによって一人一人新しい信者を獲得していかねばなりません。その際に、教会が最高の

方法として採用したのがリバイバル方式でした。その特色は(a)福音を**分かりやすく**伝える。(b)**だれにでも**必ず救いは訪れると主張する。(c)回心に際して、人間の**自由意志**を強調する。(d)**地獄の恐ろしさ**を知らせる説教が強調される。(e)**大衆にうける**ダイナミックな説教者たちが歓迎される。(f)牧師は、自分の地域で定期的にリバイバルを成功させるために、いかにその**能力を発揮**するかという面から、牧師としての能力を判定される。 **敬虔主義** 頭の宗教に対して、心情の宗教、生活の宗教という面が強調され、世俗主義化に対抗して倫理的清潔さや、禁酒禁煙とか聖日厳守、またダンス、トランプの禁止、さらに喫茶店、映画館への出入りの禁止といった様々なアスケーゼ（禁欲）の実践が強調されました。 **反知性的傾向** リバイバリズムは、個人の宗教経験と回心者の数の強調、問題の単純化と教育の軽視、教会と牧師の知的な面での指導的役割の軽視という傾向を生み出しました。 **グループ間の競争意識** アメリカ大陸への移住を、キリスト教国の歴史という観点から見れば、それは、驚くほど特殊な例であり、その中心は、人種の融合でした。それは、イングランドへのノルマン人の征服とか、中南米へのスペイン人の征服の例にみられるような、征服者と原住民とがぶつかり合い、**ゆるやかなテンポ**で、それらの二つの文化が融合し、そこから新しい文化が生まれるというパターンにははならず、むしろアメリカの場合は、ヨーロッパにあるすべての文化的、宗教的グループが、同時に**空間的に移され、みんなが衝突し合った**のでした^{xxiv}。 **教派（デノミネーション）相互の競争**という要素は、自由教会型キリスト教が成り立つための不可欠の要素でした。現実には、急速に増えつつ、西部へ移動していく大人口（その90%は教会とのかかわりを持っていませんでした）は、それぞれの教会グループにとって、**会員獲得の市場**となり、**グループ間の競争意識**を高める材料となりました。このような競争の過程の中から次のような結果が生み出されました。第一に、知らず知らずのうちに、自己を特色づけたり、絶対的なものとするところの**特定の教理、主張に固執**しようとする傾向が強くなりました。具体的には、重要な相違点というよりは、むしろ**二次的な事柄**（たとえば、洗礼の様式、教会の政治形態、伝道事業の推進方法、千年王国をめぐる諸説、アスケーゼ〔禁欲〕などの生活実践のあり方など）に見られる相違点が重視され、キリスト教全体が**共有する伝統に対する意識と掘り下げ**がなおざりにされました。第二に、お互いを正しく理解し合うということよりも、他のグループとの**相違点を永続させる**ことが、自分たちの目的であるかのように考える傾向をとるようになりました。

自由教会型キリスト教のもつ課題とその克服

以上は、宗教社会学と歴史的研究によって明らかにされている**アメリカの自由教会型キリスト教の背景と体質的特徴**です。オレプロ・ミッション（現在は、

三派合同により「インターアクト」の母体のスウェーデン・バプテスト系諸教会もアメリカのバプテスト教会を經由して「自由教会型」のキリスト教であり、それを継承しているJECもまた**同様の体質**また**課題**をうちにもっています。私たちは、歴史的キリスト教を継承擁護していると言いながら、福音を、**過去の特定の文化の画期的時代の価値や息吹**とあまりにも密接に結びつけることによって、かえって福音を傷つけてしまう危険に常に留意する必要があります。福音理解の継承・深化・発展のためには、まず**付随する非本質的な社会的・文化的・歴史的諸要素を濾過**し、次に**福音の本質的な事柄**(聖書性)を**確かめ**、さらにその福音を私たちの生のコンテキストと**私たちの歴史的状況に正しく翻訳**する(今日性)ことが大切です。

「自由教会型キリスト教としてのJEC」のもつ課題の整理

以上の論点からJECの課題のいくつかを整理しますと、「聖書と聖霊さえあれば」といった無歴史的な態度ではなく、**二千年の教会史の中に自らのルーツとアイデンティティを読み取る**努力(歴史的正確性) 特定の時代や文化において形成された**「アスケーゼ(禁欲)の実践」**を福音の本質の視点と**新しい時代・文化の脈絡においてたえず吟味・再構成し続ける**努力(今日的キリスト教倫理) リバイバリズムに起因する過度の単純化から、浅薄に陥りがちな福音理解を検証し、深みと広がりをもつ**キリスト教有神論というパラダイムに立った学問性**を探求する視野をもつこと(学問的自己革新性) 群れの個性であり特色である、歴史的運動に起因する特定の教理や主張を濾過し、**キリスト教全体が共有する伝統に対する意識と掘り下げに取り組む**こと(公同性)等を通して、私たちの世代のためだけでなく次の世代のためにもJECが**継承**している福音理解をさらにすぐれたかたちで**深化・発展**させていくことが必要です。

「自由教会型キリスト教としてのJEC」の課題克服の手かかり

そのような神学的作業に取り組むための**歴史的判断力**(歴史神学の素養)、**神学的パースペクティブ**(組織神学の素養)、**宗教社会学的分析能力**を養う**手ほどきをしてくれる書籍**として、これまで紹介してきました宇田進師の「**福音主義キリスト教と福音派**」(歴史神学書)と来年三月に来日されるM.J.エリクソン師の「**キリスト教神学**」(組織神学書)等、を推薦することができます。これらの書籍は、改革派からホーリネス派、そしてペンテコステ派までも含む**福音派全体で「共有しうる神学的素養」**を豊かに養うため教派を超えて用いられているものです。神学書としては珍しく、**きわめて分かりやすい内容**で構成されていますので、教職者・信徒リーダー・CS奉仕者等を中心として多くの兄弟

姉妹の役に立つと思います。また、上記の書籍を **J E C と K B I の脈絡において解説し続けることを使命**として取り組んでいます。「**一宮基督教研究所**」発刊の**ブックレット**^{xxv}も多くの方に読まれています。必要な方にはどなたにでも資料リストのカタログを無料でお送りしていますので、遠慮なくご用命ください。なお、一宮基督教研究所の動きは、2002年11月3日のクリスチャン新聞「特集：ITを使って教育・研究」(第五面)にインタビュー記事として紹介されていますので、ご覧ください。

J E C の源流と歴史的遺産 10

近代のリベラリズムと J E C

一宮基督教研究所 安黒務

近代のリベラリズムと J E C

前回は、敬虔主義の遺産と J E C の関係についてみました。今回は、**自由主義**(リベラル)教会と**福音主義**(エバンジェリカル)教会の**対立の構図**の中の J E C の位置づけを考えてみましょう。現在、J E C では「**日本福音同盟**」への加盟の方向で相談が進められていますが、そのことの歴史的意義はこの構図を理解するとよく分かるので少し長くなりますが詳述させていただきます。

18世紀の啓蒙思潮とは^{xxvi}

プロテスタント神学は、17世紀の正統主義において一つの完結に達したと見られていますが、18世紀に入ると強力な嵐に見舞われました。その嵐とは、一般に「**啓蒙思潮**」として知られているヨーロッパの思想運動のことです。カントという哲学者は、「啓蒙」ということを「**人間が自分の未成熟状態から抜け出て成人になることである**」と言っています。このことは、具体的には、教会の監督や指導に従っている状態(他律の立場)から自由となって、あらゆる事柄において**自分自身の理性に立つ**ことにほかなりません。つまり、今までの伝統、権威、慣習からいっさい解放されて、**自律的理性の立場に立つ**ことを意味しています。これはカントの『**啓蒙とは何か**』(1784)の中心をなす思想ですが、この主張は何かエデンの園で神の権威に挑戦したサタンの語りかけと類似しています。サタンは人間に「**神は、ほんとうに言われたのですか**」(創世記 3:1)、「あなたがたがそれを食べるその時、あなたがたの目が開け、あなたがた

が神のようになる」(創世記3:5)と詰め寄り、**神の権威からの独立の道**を勧めたのでした。このような自立的理性の立場を根本とする啓蒙思潮は、全体として見ると、理論では**科学的自然主義**をとり、倫理においては**相対主義的な理性道徳**、宗教については、伝統的な教会の啓示宗教に反対して**理性宗教**ないしは**無神論**をとり、歴史については**進歩**を確信していました。

啓蒙思潮を背景にした19世紀の自由主義(リベラリズム)^{xxvii}とは

具体的には、近代科学と聖書が衝突する場合には、**科学に権利を譲るべき**であると考えました。また超自然的な要素や神的歴史を内蔵している**聖書歴史の信ぴょう性に疑問を付す**ようになりました。キリスト教の絶対性を否定し、**宗教を評価する上での相対主義**が主張されました。自由主義(リベラリズム)とは、このような啓蒙思潮の考え方に**批判・改革の道**ではなく、「**適応・適合の道**」を選んだキリスト教の流れのことです。リベラリズムと言っても、広範囲な世界ですが、主な流れとしてジョン・トーランドの『神秘的でないキリスト教』によって代表される英国の理神論や、啓示内容を「**人間理性の網**」に引っかかる真理に限定し、原罪、永遠の刑罰、悪魔、神の子キリストというような**伝統的教義を否認**する19世紀の自由主義神学をあげることができます。

20世紀におけるプリンストン神学校のリベラル化事件

20世紀における歴史的な事件のひとつの実例として、以前紹介しましたプリンストン神学校の出来事を紹介しておきましょう。「プリンストンと言いますと、長年、米国合衆国長老教会の**中心的な神学教育機関**であったばかりでなく、北米大陸における歴史的改革派**信仰の牙城**(がじょう)でもありました。一貫して聖書の信仰を保持し、その学的宣揚につとめていました。しかしながら、1924年頃のプリンストンの事情は、だいぶ違っていました。当時、米国の教会全体が、次第に浸透しつつあった自由主義神学の問題に直面していました。長老教会もその例外ではなく、その年に、聖書の**十全靈感**、キリストの**処女降誕**、キリストの**代償的贖罪**、キリストの**からだの復活**、キリストの**奇跡**、の**五点を否認**するという内容の<**オーバン声明書**>が出され、1292名にのぼる牧師たちがそれに賛成の署名をする事件が起りました。...1929年に、プリンストンは二つに割れ、メイチェンたち、歴史的改革派信仰に忠実たろうとする教師たちを中心として、フィラデルフィアにウェストミンスター神学校の創設が余儀なくされるに至りました。^{xxviii}」歴史に目を開きますと、「それでキリスト教でありうるのか？」と首をかじげざるを得ないようなことも起こってきました。

福音主義同盟の結成の歴史的背景

時計の針を百年ほど戻しますと、このことに関連して、自由主義が隆盛をきわめようとしていた時期に起った一つの歴史的出来事に注目することが大切です。それは1846年にロンドンで結成された**福音主義同盟** (Evangelical Alliance) です。当時、ヨーロッパは政情不安の中にあり、キリスト教界は自由主義の問題の大きさを感じ始めていました。こうした状況の中で、1846年8月19日から23日にかけて前述の会議が開催されました。これには**聖書の信仰に基づく国際的一致と協力**の必要を強く感じていた世界の50教派から800人の代表が参集しました。会議のハイライトの一つは、何といたっても次のような**9項目より成る福音主義信仰**を確認し、それを全教会に向かって表明したことでした。聖書の**神的靈感**および**神的權威**、**聖書の充分性**、**聖書解釈**における個人的判断の権利および義務、**三位一体の神**、**アダムの墮落の結果としての人間の全的墮落性**、**神のひとり子の受肉**、**人類の罪のための彼の贖いのわざ**、**彼の中保的とりなしと支配**、**信仰のみによる罪人の義認**、**罪人の回心および聖化における聖霊の働き**、**靈魂の不滅**、**肉体の復活**、**正しい者の永遠の祝福**と**悪い者の永遠の刑罰**を伴う、**主イエス・キリストによる世界の審判**、**キリスト教伝道者職の神的制定**、**洗礼と聖餐の二礼典の義務と永続性**。このような信仰の立場は、宗教改革の立場を強調していた19世紀中葉のイギリス・**プロテスタントの基本的信仰**を反映したものです。19世紀末から20世紀にかけて誕生をみた今日の多くの福音的な諸教会や諸団体の信仰規準は、だいたいにおいてこの**9箇条を基本**に作られていきました。19世紀半ばに、アメリカのバプテスト教会を背景にスタートしたスウェーデン・バプテストの諸教会とそれを母体としてきたオレブロ・ミッション(現在インターアクト)も**同様の信仰告白**をもっています。オレブロ・ミッション(現在インターアクト)もスウェーデン福音同盟の一員であり、それを通して世界福音同盟のメンバーです。以上のことを念頭におきますと、J E Cの日本福音同盟への加盟は**歴史的必然**と言えます。

J E Cと福音同盟加盟問題の経緯

12月にJ E Cから封筒を受け取りました。その中には「私共の長年の懸案でありました『**日本福音同盟(J E A)への加盟**』について、理事会では**加盟の方向**で話し合いを進めております。」との理事長の富浦師の挨拶文と関連資料が入っていました。私の感想は「**ついに来るべきものが来た。**」「少し遅すぎるくらいだったかも知れない。」というものです。以前オレブロ・ミッション(現在インターアクト)のアジア局長が来日された時、東京で訪れられ

た場所が「日本福音同盟」の事務所であり、「JECはなぜ日本福音同盟に加盟しないのですか？」と尋ねられたとのこと。当初からJECの側にはまったく問題はありませんでした。問題は、むしろ日本福音同盟の側にありました。それは日本福音同盟が形成されていった歴史的経緯に関係があります。日本福音同盟は、**改革派系諸教会**が中心の**日本プロテスタント聖書信仰同盟**(JPC)と**ホーリネス系諸教会**が中心の**日本福音連盟**(JEF)が母体となって形成されていきました。それらの教会は当初から「**ペンテコステ的・カリスマ的な聖霊経験**(使徒時代の超自然的な聖霊の賜物の働きを今日も普遍的日常的に経験できる)」を行き過ぎたものとみていました。それで日本福音同盟への加盟条件に「**いわゆるカリスマ条項**」を付加していたのでした。世界の福音同盟の大半がペンテコステ・カリスマ派に対して開かれたものであり、彼らはその中できわめて重要な貢献をしておりましたが、日本ではペンテコステ・カリスマ派に対して“**白い目**”が向けられていたのでした。その結果としてペンテコステ・カリスマ・第三の波の諸教会の交わりの場として「**日本リバイバル同盟**(NRA)」が結成されました。極論しますと日本では「**神学を重視し、聖霊経験を軽視する流れ**」と「**聖霊経験を重視し、神学を軽視する流れ**」がありますが、JECは二つの流れの真ん中に位置しており、歴史的な正統的な神学にしっかりと根ざしつつ、聖霊経験にもオープンな、バランスのとれたユニークな群れです。日本福音同盟側が「**いわゆるカリスマ条項**」を取り下げた今、JECの日本福音同盟への「**加盟の時は満ちた**」と言えると思います。JECは二つの流れの間にあり、両者の**架け橋的な役割**が期待されています。

「福音派」についての誤解と真の定義

福音派と申しましたが、その範囲についての定義はさまざまです。ときどき**カリスマ派對福音派**といった具合に狭い意味で対置する傾向が見受けられますが、これは「福音派」の**真の定義**^{xxix}と**神の御旨**を見失わせる危険があります。今日の現象や議論のみに目を配るのではなく、歴史的かつ神学的に掘り下げて検討することが大切です。宇田師は「福音派とは、1846年に結成をみた**福音主義同盟の9項からなる信仰基準**^{xxx}と、1974年の世界伝道会議がだした『**ローザンヌ誓約**』の中に表明されている聖書的信仰と宣教観を信奉する、**聖霊派から改革派までのキリスト教共同体**、あるいは連合体を指す。」と簡潔に表現されています。ペンテコステ派・カリスマ派・第三の波と呼ばれる諸教会は、当然のごとく「**モザイクのように個性と特色をもつ多様な教派の集まりである福音派の一員**」なのです。

歴史的必然としてのローザンヌ誓約への応答

JEC 宣教50周年で採択されました<ローザンヌ誓約第七項 伝道における協力>には、以下の通り誓約されています。「私たちは、**真理に根ざした、教会の可視的一致**が神のみ旨であることを確認する。伝道はまた、私たちの一致を強く求めている。なぜかといえば、私たちの間の**不一致**が和解の福音を台無しにしてしまうように、私たちの**一致**は私たちのあかしを強化するからである。だが、私たちは、組織・機構上的一致は多くの形態をとり得るものであり、それは必ずしも伝道を推進するものとはかぎらないということも知っている。とはいえ、**同じ聖書的信仰に立つ**私たちは、交わりと、働きと、あかしとにおいて、**一致を密にすべき**である。私たちは、私たちのあかしが、時として、利己的な個人主義や、むだな重複によって、損なわれてきたことを告白する。私たちは、真理と、礼拝と、聖潔と、宣教とにおける、**より深い一致**を求めて行くことを約束する。そして、私たちは、教会の宣教活動の前進のために、相互の士気を鼓舞するために、資力と経験とを互いに分ち合うために、**地域的な協力**と、**機能上の協力**をより一層発展させて行くことを推奨するものである。^{xxx}」誓約にある通り、JECのみでなく、ペンテコステ派・カリスマ派・第三の波と呼ばれる諸教会の「日本福音同盟」への加盟は、**歴史的必然**であり、**神の御旨**に沿ったことであると確信します。

JECの源流と歴史的遺産 11

ミラード・J・エリクソン博士とJEC

一宮基督教研究所 安黒務

エリクソン博士とJEC

この一年、使徒的キリスト教からはじめて「キリスト教二千年の歴史的展開」をおおまかに概観してまいりました。今回と次回(最終回)は、「**JECの源流と歴史的遺産の集大成**とも言うべき組織神学書」を著述し、また「私たちの時代における**最も尊敬されるバプテスト**であり、**福音主義の神学者**である^{xxxii}」といわれるエリクソン博士とJECについて考えてみたいと思います。

エバンジェリカルとしてのJECの神学の特徴

エバンジェリカル(福音派)としてのJECの神学は、源泉への姿勢、つまり**歴史的教理的ルーツ**とそれとの**連続性**を何よりも大切にすることを特色としています。このことは、具体的には、「**聖書に書いてあるとおり**」(コリント 15:3,4)をその展開の究極的原点とすることをはじめとして、公同信条に表明され、「**あらゆるところで**(共同性)、**常に**(古代性)、**すべてによって**(一致同意)信じられてきた」古代教会の正統信仰、16世紀**宗教改革**の神学、近世の福音主義**諸信条**、17世紀プロテスタント**正統主義**、ピューリタニズムを含む近代の**敬虔主義**と**信仰復興運動**との深い結びつきを常に意識しています。そしてさらにより近い歴史的ルーツとしては、...基本的に宗教改革の立場を強調していた19世紀中葉の英国プロテスタントの基本的反映と見られる前回記述しました**福音主義同盟**の9箇条ならびに**ローザンヌ誓約**を共通に認めていると表現することができます^{xxxiii}。そして、このような基盤の上にたって、この50年の「十字架のメッセージ」や「聖霊経験への強調」がありました。

JECの特質、それを組織神学のかたちで表現したとしたら

それでは、以上のような伝統に沿って、エバンジェリカル(福音派)としてのJECの神学はどのような**組織神学的位置づけ**ができるのでしょうか。19世紀後半から21世紀初頭までのエバンジェリカル(福音派)における神学研究を概観してみますと、欧米中心に**多くのすぐれた神学者**が活躍しています。また教派別にみますと、改革派系、聖公会系、バプテスト系、ルター派系、ウェスレアン系、ディスペンセーション主義系等の**多様な組織神学書**が出版されてきました^{xxxiv}。それらの中で、日本の福音派の神学的重鎮のひとりであられる宇田進師が最も高く評価されている組織神学者のひとりが**エリクソン博士**であり、彼の主著「**キリスト教神学**」です。この書物は、今後JEC、KBIを含め日本の福音派において教派を越えて「**基準的な組織神学書**」として用いられていくことが期待されています。それが「いのちのこ」とば社」から出版されるゆえんです。

私の書齋にはかなりの数の「組織神学書」があります。そしてある時、KBIの高橋昭市師から「安黒先生、組織神学を教えてくださいませんか。」と言われましたとき、洋書でありましたが迷うことなくエリクソン博士の「キリスト教神学」を選び取りました。どのような組織神学書を使用するかで、その群れの**神学的特質**が**50年間規定される**と確信していたからでした。そしてその研究に没頭して今日まで導かれてきました。彼は私たちと同じく**スウェーデン・バプテストの流れをルーツとするクリスチャン**であり、**福音主**

義とバプテストの遺産を忠実に**継承・深化・発展**させている神学者です。彼の主著「キリスト教神学」の至るところにみられる「**スウェーデン・バプテストの特質**」は、まさに「エバンジェリカル（福音派）としての**J E Cの神学的特質**」を組織神学のかたちで表現したら、このようになるであろう。」と心底から納得させるものです。くすしくもJ E Cの教職者がその**翻訳**を受け持つことになったのも、また以下に紹介します「関西における二つの来日講演」の**受け皿**となりましたのも、あながち“偶然”ではなく、**神の摂理の御手のなす“必然”**、と言えるのかもしれませんが。

J E C拡大教職者会：それは、J E Cの“**空気**”にかたちを与える時

最初に、3月11日に西神・中国ブロックの教会が主催します「J E C拡大教職者会」の意義・目的を説明させていただきます。

古代中国の戦争体験を集大成した孫子の兵法書には「**彼を知り己れを知れば百戦あやうからず**」とあります。J E Cの特徴は「**十字架と聖霊**」という言葉で表現されます。しかしそれだけではJ E Cの一部を理解したにすぎません。J E Cの宣教母国の教派的背景はスウェーデン・バプテスト系諸教会であり、私たちJ E Cは**スウェーデン・バプテストの特質**をあたかも“**空気**”のように無意識に継承しています。今J E Cは宣教50周年を節目に、**新たな50年の進路**を見渡しています。それゆえ、それらの**歴史的・教理的遺産**を正しく自覚しまた評価して**継承・深化・発展**させていくことが必要とされています。

まさに、そのような時に、**エリクソン博士**の主著『**キリスト教神学**』が出版されることとなり、またその出版を機会にご本人をお招きできることとなりました。博士は「**教会への献身を伴って聖書的な主題を強調する神学は、バプテスト的な主題を強調する神学**を生み出す^{xxxv}」と語っておられます。このことはJ E Cの**神学**が福音派全体の共有しうる**公同的な神学的特質**を宿しており、日本の福音派の中で**穏健・中立・公平な座標軸的位置**にたちうることを意味しています。またそのことにより、日本の福音派の中でますますかけがいのない**貴重な群れ**となっていける可能性を秘めていると思います。私たちJ E Cが、この神の時を生かし、さらに「**己(おの)れを知る**」機会とさせていただき、「**エリクソンの神学をJ E Cの神学の座標軸として**」福音派の諸教派と連携を深め、**宣教と教会形成と神学教育**における**共同戦線**をより一層強化していくことができると願っています。

関西講演会（一般公開）：あなたも神の創られる歴史の目撃者の一人に！

第二に、3月12日にKBIで開催される「**関西講演会**」の意義・目的を説明させていただきます。

この関西講演会は、主の恵みにより「福音主義神学会・西部部会春の研究会」をいつもより一ヶ月繰り上げていただけることとなり、**福音主義神学会西部部会**と**関西聖書学院**の共催のかたちで開催されます。関西の福音派の神学校・大学の代表的な先生方が勢ぞろいされ、集会の奉仕を助けてくださいます。ひとりの神学者の講演に関西のみならず全国規模でこのような協力がみられるのは、あのビリー・グラハム大会以来かもしれません。集められる数では比べようもありませんが、**福音派の神学に将来にわたって与え続ける影響・質的内容**という点では、それをはるかに凌駕しているといっても過言ではないと思います。エリクソン博士は「**牧会者のハートと学者の知性**をあわせもつ神学者^{xxxvi}」と評され、その分かりやすい語り口は**世界的名スピーカー**としての評価の高い方です。それゆえ教職者のみでなく**信徒の方々にも有益な講演会**になると思われます。ある神学者は、「組織神学書は電話帳を読むようにではなく、**讚美歌**を歌うようにさせなさい。」とアドバイスしました。博士の「**キリスト教神学**」はまさに「**魂のこもった讚美歌**を賛美している」かのように分かりやすく、しかも高度な内容です。米国では、福音派系キリスト教大学・神学校、そして教職者と信徒の方々の間で教派を超えて**基準的組織神学書**と高く評価されているものです^{xxxvii}。

今回の講演会では、著者自身の口から、主著「キリスト教神学」における**問題意識**、そしてその**今日的意義**を語っていただきます。さらに聞くのみではなく、その価値を認め神学校の講義で用いている日本人教職者による「キリスト教神学」の本質をついたレスポンスと、さまざまの観点からの有意義な**ディスカッション**、そして**全体総括**へとひとつの流れとなって展開していきます。この講演会は「単なる講演会ではなく、日本の福音派の教職者が、そして信徒の方々が『キリスト教神学』を**どのように受けとめ、どのように活用していくべきかの21世紀の神学的指針**」を提供する場となることでしょう。ご期待ください、そしてあなたも参加し、神が創られようとしている**歴史の目撃者**となってください。

J E C の源流と歴史的遺産 1 2

- 結び -

一宮基督教研究所 安黒務

J E C の神学的特徴：歴史神学の視野から、そして組織神学の視野から

一宮基督教研究所の使命の一環として紙面をいただき、この一年間「J E C の源流と歴史的遺産」のシリーズを連載させていただけましたこと、そしてJ E C とJ E C を越えた多くの方々、多くの教会から「一宮基督教研究所」の働きに対する支援献金や資料購入の依頼を受けてきたことに心より感謝申し上げます。また意図したわけではありませんが、この三月に連載の終了にあわせるかたちで「**J E C の組織神学書**」とも言うべき、拙訳の「キリスト教神学」がいのちのことは社より出版されることにも神さまの不思議な導きを感じています。

さてここまで、K B Iでの「福音主義神学」の講義の蓄積をベースにして、二千年の教会史における「J E C の源流と歴史的遺産」を**神学的・教理的要素、歴史的要素、社会的・文化的要素**において見てまいりました。これらの記述を通しJ E C の立体的な把握を得る一助としてくだされば感謝です。今回は“歴史神学の視野から”J E C の神学の特徴を眺望しましたが、また機会がありましたらK B Iでの「組織神学」の講義の蓄積をベースにして“組織神学の視野から”J E C 神学の特徴についてご一緒に学べたらと思っています。

J E C とエリクソンの神学：良き伝統を継承・深化・発展させる軌道の敷設

J E C 50周年記念誌小論文として「私は**21世紀におけるJ E C の神学のあり方・方向性**というものを真剣に考慮していくとき、“**ミラード・J・エリクソンの神学**”を無視することはできないと思います。私の提案としてですが、『エリクソンの神学をJ E C の“**神学的座標軸**”と位置づけ、その下にJ E C の過去と現在の霊的遺産を適切に整理し、そして今後展開してゆくであろう種々のムーブメントを適切に関係づける』というかたちで、J E C の流れの中のよきものを**継承・深化・発展させていく軌道**を敷設することができると思います。」と書かせていただきました。

毎年この季節にK B I神学生の卒業論文を読ませていただき感謝していますことは、「人間論」「聖化論」「教会論」等の卒業論文において「エリクソンの組織神学の学びを“**神学的座標軸**”とし、その座標軸の中に神学生個々人の**問題意識**や

所属教派の理解を位置づけ、クリティカルに評価し新たな提言をする力が神学生の間で増し加わっている」ことです。神学生の皆さんにこのような力が身につけていることは、神学生それぞれが所属している教派の伝統のうちの良きものを継承・深化・発展させていく力がついていることを証ししています。私は神学生に「皆さんは、それぞれの所属教派の未来を担う人々なので、手抜きをせずに、世界的スタンダードな組織神学書である、このエリクソンの『キリスト教神学』をしっかりと学んで、バランスのとれた神学的な座標軸を身につけてください。」と常にチャレンジし、毎月のように「エリクソン神学」の各論におけるレポートを提出してもらっています。最初は慣れない人もあり、不平不満もありましたが、今ではそれぞれの力量に応じ、自発的かつ積極的にかなり充実したレポートが提出されるようになってきています。神学生がこの学びの意義と真価に目覚めてきている証拠です。

KBIとといいますと、これまでは「ペンテコステ・カリスマ系で伝道熱心ではあるが、神学教育では見るべきものがない。」というのが、福音主義神学会や保守的福音派の人々の誤った評価でありました。しかし、今回のエリクソン博士の書籍翻訳と講演会を契機として「KBIとJECとは、ペンテコステ・カリスマ的経験にオープンでありつつ、エリクソン博士の『キリスト教神学』を座標軸にする群れである」ことが公けのものとなり、神学の内実においても高い評価を受けつつあります。

JECはまもなく「日本福音同盟（JEA）」に加盟しようとしています。そしてその先には、日本福音同盟の独立した神学研究部門ともいえる「日本福音主義神学会（JETS）」への入会が視野に入ってきます。私には夢があります。それは、「将来JECやKBI卒業の教職者の中から福音主義神学会^{xxxviii}で活躍し貢献していく多くの人材が育っていくこと」です。それは神学と実践の両面におけるバランスを重んじるJECとKBIのビジョンにもかなうことです。“雨後のたけのこ”のように新しい神学校が作られては消え、消えては作られる、神学校の“サバイバル（生き残り）”競争の時代において、今KBIは宣教のパス（情熱）に満ちた大田院長の下、諸教師方とともに充実した神学のロゴス（論理）を提供する神学教育を目指してまい進しています。ペンテコステ・カリスマの経験にオープンでありつつ、このように神学の面でも充実しバランスのとれた神学校を日本では他に見出すことはできません。

“継続神学教育機関”としての一宮基督教研究所の新たな挑戦は続きます

私は今後、邦訳されたエリクソン博士の「キリスト教神学」が、KBIにおいてだけでなく、JECの各教会の聖書研究会や信徒リーダー・CS奉仕者の方々のメッセージ準備に、また「組織神学的瞑想」として信徒の皆さんの個人的なデ

ポーションにおいて用いられていくことを願っています。JECの総会においては、我喜屋師・道本師・富浦師の歴代の理事長が、スウェーデン・オレブロ・ミッション（現在のインターアクト）の良き伝統の継承を語ってこられました。私もまた、オレブロの宣教師が開拓され、JECの第一世代の教職者の先生方が築きあげてくださったJECの群れ、またKBIの学び舎が、JEC・KBIの神学の集大成としての「キリスト教神学」を通して伝統の中の良きものを継承・深化・発展させていくことを切に祈っています。「一宮基督教研究所」の機能もその線上にあります。教会でもなく、聖書学校でもなく、宣教団体でもありませんが、神さまからの特別な召しと賜物をいただいているユニークな働きであると信じ、JECとKBIの“継続神学教育機関”としての一宮基督教研究所の新たな挑戦は続きます。引き続き、この小さな働きを覚えて祈り支えていただければ感謝です。

-
- i ストット：英国の福音派（エバンジェリカル）のリーダーのひとり。
 - ii ローザンヌ会議：1974年にスイスのローザンヌで開催された世界伝道会議
 - iii 宇田進「福音主義キリスト教と福音派」いのちのことば社、p.54-55
 - iv 奥山実「伝道学」講義ノート
 - v 本居宣長：1730～1801 名著「古事記伝」に代表される江戸中期の国学者。
 - vi 滝元明「千代に至る祝福」いのちのことば社、1972、pp.17-18
 - vii 宇田進「福音主義キリスト教と福音派」いのちのことば社、1993、pp.60-67
 - viii 宇田進「福音主義キリスト教と福音派」いのちのことば社、pp.68-87
 - ix ウォッチマン・ニー「キリスト者の標準」いのちのことば社、pp.1-22
 - x Millard.J.Erickson, “Introducing Christian Doctrine” Baker, p.345
 - xi 宇田進「福音主義キリスト教と福音派」いのちのことば社、pp.88-96
 - xii 渡辺公平「弁証学講義要綱」講義資料、pp.1-7
 - xiii 日本バプテスト教会連合「信徒手帳」、pp.69-75
 - xiv 宇田進「福音主義キリスト教と福音派」いのちのことば社、pp.97-103
 - xv 丸山忠孝「信条学」講義ノート、pp.50-51
 - xvi 宇田進「福音主義キリスト教と福音派」いのちのことば社、pp.104-107
 - xvii S.E. オールストローム「アメリカ神学思想史入門」教文館、pp.58-59
 - xviii Millard.J.Erickson, “Christian Theology”, Baker、書評
 - xix 宇田進「福音主義キリスト教と福音派」いのちのことば社、1993、pp.108-118
 - xx ウォッチマン・ニー「キリスト者の標準」いのちのことば社
 - xxi Dana Roberts “Understanding Watchman Nee,, Haven Books,1980, pp.50-51
 - xxii “Five Views on Sanctification,, J.Robertson McQuilkin ‘Keswick View’,1987,pp.152-156
 - xxiii 宇田進「福音主義キリスト教と福音派」いのちのことば社、1993、pp.118-124
 - xxiv S.E. ミード「アメリカの宗教」日本基督教団出版局、1978、pp.18-19
 - xxv 一宮基督教研究所ブックレット・資料カタログ（無料）[問い合わせ・申し込み先： & Fax.0790-72-0235（昼） 63-0252（夜） E-Mail: aguro@mth.biglobe.ne.jp]
 - xxvi 宇田進「福音主義キリスト教と福音派」いのちのことば社、1993、pp.125-126
 - xxvii 宇田進、前掲書、pp.126-129

-
- xxviii ジョン・マーレー「聖書の贖罪観」オランダ・キリスト教文庫、1993、宇田進『補論：プリンストン神学とジョン・マーレー教授』pp.78-79
- xxix 熊澤義宣、野呂芳男編「総説 現代神学」日本基督教団出版局、1995、宇田進『現代福音派教会の神学』pp.187-188
- xxx 宇田進「総説 現代福音主義神学」いのちのことば社、2002、pp.435-440
- xxxi J.R.W.ストット / 宇田進訳「ローザンヌ誓約 解説と注釈」いのちのことば社、1976、pp.64-65
- xxxii D.S.ドッケリー編集「福音主義の思索における新しい次元」、『ミラード・J・エリクソン：教会のための神学者』、p.20
- xxxiii 熊澤義宣、野呂芳男編「総説 現代神学」日本基督教団出版局、1995、宇田進『現代福音派教会の神学』p.197
- xxxiv 前掲書、pp.198-205...戦前・戦後の福音派の著名な組織神学者と著作の解説。
- xxxv 前掲書、p.21
- xxxvi 前掲書『ミラード・J・エリクソン』の著作についての文献的エッセイ』、p.443
- xxxvii 前掲書、p.19
- xxxviii 「**日本福音主義神学会**」...1970年4月の創立以来、日本福音主義神学会は聖書信仰に立つ福音主義諸教会の健全な成長と発展を願い、その神学研究を助け、相互の交わりを図っています。活動は、西部・中部・東部の各地区で**春季と秋季の研究会**、隔年に**全国研究会議**、学会誌「**福音主義神学**」が毎年発行されています。教職者・信徒・神学生それぞれの立場で入会ができます。希望者は安黒までお問い合わせください（推薦人にならせていただきます）。

エリクソン神学を神学的座標軸としての「JECの特色の継承・深化・発展」のモデル・ケースのひとつとして

【日本福音主義神学会 西部部会秋季研究会 KBI卒論発表 菅神学生(卒)】

*要約 我喜屋 聖化論とウエスレーアン聖化論の比較研究(エリクソン神学の座標軸において)

*ミラード・J・エリクソン神学による聖化の定義の理由

1. エリクソンの組織神学書が福音主義的神学校の教科書として世界的なレベルで採用されている現実。
2. 彼は穏健カルヴァン主義の立場であるが、教理を論ずる方法の内に自教派のみならず、他の代表的神学の評価を公平に行う透明性と、福音的教会の公同性に関わる共通部分を抽出した上で枝葉の理論を派生させている点に、公平さにおいて信頼感が感じられる。

* 福音主義神学における聖化の定義(エリクソンキリスト教教理入門より)

a. 聖化の意味

1. 地位的聖化において

「聖である」事は神に属する事、神の所有とされた事。回心の時点、クリスチャン生活の原初において起こっている事柄。新生と義認により与えられた霊的生命の展開、継続的成長。区別はあるが義認と不可分なもの。第一義的に地位的聖化の存在を認識するべきで、「状態としての聖化」はこの結果に続く。

クリスチャン生活の開始の時点の義認、回心において主に属するという意味で地位的聖化は完全。

2. 実質的聖化

第二の意味は道徳的善良さ、霊的真価に関係がある。完成されるまで一生涯のプロセスを要する。

義認の法廷的客観性に対して信仰者の内的人格に影響する主観的な御業。

b. 聖化の特徴

1. 神ご自身の御業

聖化は超自然的な神の御業であり、神ご自身によってなされ、我等の道徳的、霊的自己改良ではない。

2. その継続性

この神がなされる主権的な働きは漸進的な事柄。

3. 聖化の目標

キリストご自身の似姿。単なる外見的、表面的類似ではない、存在を構成している一連の特質や資質の全てを意味する。従って、これが容易なものではない事が明らか。

4. 聖霊の働き

聖化は聖霊の働き。潔められた人格の資質は「御霊の実」として聖書に述べられている。聖霊と信仰者の関係として、信仰者は御霊によって歩む、御霊に属する事を考える、御霊の中にある、御霊によって体の行ないを殺す、御霊によって導かれる、御霊が信仰者の神の子たる事を証する、ローマ8：4～16、、、、、以上のようにキリストの似姿とする働きを遂行するのは聖霊なる神。

5. 信仰者との共働性（神律的相互性）

聖化において全てを与えのは聖霊であるが、聖霊の御業の特徴として、信仰者を通して御業を遂行される。

c. 結び 聖化とは？

1. 基本的に回心の時に起こっている霊的生命の継続的成長。新生、義認と不可分。地位的聖化と、実質的聖化に区別される。聖化のプロセスは一生涯。完成に向けて継続的。聖霊なる神の御業。その御業を信仰者を通して、共働される事によって遂行される方法を定めておられる。

d. 聖化に関する二つの立場 完全あるいは不完全か？

1. 西欧神学界において対立的な二つの代表的立場。

この地上で信仰者の聖化が完成される可能性があるか否か？いわゆる「全き聖化」は可能か？

2. 肯定論

. ジョン・ウエスレー 罪への傾向である自我の死、罪の習慣性の完全な潔め、全ての行為の動機が愛に全うされるという、三点においては完全でありうる。

3. 否定論 主にカルヴァン主義の漸進的聖化の神学。

* 「完全」肯定論 ジョン・ウエスレーの聖化論（ウエスレー著作集 神学論文 上下より）

a . その神学

1 . 「キリスト者の完全」についての教え

18世紀ジョン・ウエスレーによって提唱せれる聖化の教理。 聖書が現世で信仰者に獲得する様に求めている聖化における完全さの基準。 条件として、「自我の完全な死」、「罪性の完全な潔め」、「全ての行為における動機が愛に全うされる事」、特に 動機における「愛の完全」を特徴としている。 同時に知識、経験の欠如から来る、行動の失敗、過失及び、肉体的欠陥から来る弱さによる罪を除外する。

行為の完全ではなく動機と意図における完全。 よって、具体的には「故意に罪を犯す事からの解放」。

基調にあるのは、「神への愛と隣り人への愛による支配」。 また、同時に完全は保持せねばならず、後退のありえぬ固定化した状態ではない。 後退後の回復、再獲得も信仰によって可能。

2 . 「聖霊の証」の教理

「全き聖化」の成就する時と方法についての教え。 新生、回心の時点と全く同じ原理で「信仰によって」与えられる。 時間的には、義認（これを第一の転機とし、）の後、死、もしくはその直前の時期よりも前に「第二の転機、恵み」として与えられ、即時的、一瞬間的な経験として与えられる。 これは主体的な経験であり、その経験の確証が聖霊によって、義認、新生時に神の子供とされた自覚が与えられるのと同様に罪性からの解放を御霊が証する。

b . ウエスレアン聖化論の特徴と傾向

「キリスト者の完全」という状態の描写によって、聖書において個々に列挙されている御霊の実が愛の動機によって人格的に統合された場合の聖化における具体的モデルの提供により、聖化に関して、聖化をいわゆる潔癖さ、規律正さといったイメージから、神との関係における親密さ、隣り人への愛の実践の倫理へと一つの方向性を与えた。これは信仰者に「実質的聖化」への着目する動機を促すものとなる。

更に、「完全」において、聖霊の確証が即時的に、信仰によって与えられる事を提唱した事は、聖化において信仰による決断を促し、「聖化における聖霊との神律的相互性」（神人協力説ではない）を持って、主体的な聖化体験へと至らせる。 また、「完全」はいつでも、一瞬間的に獲得可能でありまた、後退後も信仰によって即、回復可能としている故、信仰の原理を実存的かつ継続的なものとする。 これは、ウエスレーが聖化の主権者である聖霊の働きを漸進的、論理的順序に規定されない、使徒行伝的なダイナミックな働きと考えていた事による。 ウエスレーの聖化論は「完全」

の提唱を有力な方法とした、極めて実存的、動的な聖霊による神学といえるかも知れない。

本質的に聖化を促進させる事において有益な教えであるが、ウエスレー自身がこの教理を教える方法と、受領者の成長の段階を良く吟味して教えるべき事を述べているが、例えば、超カルヴィニズムの様に、義認と新生が二重予定によって根拠を与られている立場の人々の場合、聖化の段階で信仰によって「救いを確証する」という面がある傾向を仮定すると、「完全」の獲得が義認において本来持つべき「救いの客観的保証」との心理的すり替えが起きるかも知れず、「完全」を固定化したものと誤解してしまうかも知れない。

その場合、ウエスレーが本意とした信仰の実存的姿勢を信仰者に生き生きと継続させるという目的が消散してしまう。また、「完全」の教理が単なる「心理状態、境地」といったものと取り違えられないよう、この教理の「聖霊によって、信仰によって」いつでも受けうるゆえに、継続的に祈りと御言葉の生活の中で待ち望む姿勢を第一義的に持つ事の強調を忘れてはならない。極めて実際的であるからこそ、提示の仕方に配慮を要する教理かも知れない。

* 我喜屋光雄師の聖化論

a . 我喜屋聖化論の輪郭の仮定

1 . メッセージの特徴

聖化において三つの立場があるとし、1 . 根絶説（罪性の傾向である自我が除去される）2 . 圧迫説（聖霊による罪性の抑制）3 . 合一説（自我と主体的自己との分離、キリストの御霊との合一）この中で、合一説を採る。この事を信者がキリストの十字架の死によって自我、古き人との「分離」、キリストの復活により彼の御霊と結合、合一されたと考える。（ローマ6：5）あくまでも、聖化において自我の「根絶」ではなく、「分離」と考える。この事を「神は古き人を切り離しはしたが、古き人を取り除く事はしなかった。」と語られる。更に、分離され聖霊によってキリストと結合、合一された者であるとする。実質的にはキリストと合一させられた者であるが、分離されたとはいえ、自我の存在自体が無くなってしまったのではないので、日常の感覚としては、古き人、自我の存在感と、キリストにある者としての実感の二重性を感じるという、一見矛盾している様な存在が、現実に生きているクリスチャンの状態であり、パウロがローマ書7：25で述べている事であるとする。であるから、この現実の理解に立ってキリストにある者としての立場を信仰によって選択して行く事が、ローマ書8：4の経験であると言われる。そして、この経験を「転機」とし、一回きりではなく、毎瞬間の出来事の中で選び取って行く事により深まって行くという。この事は「信仰生活の潔めに関する出来事を、十字架の死と葬りと復活という行程に当てはめて、この行程を何度も往復する事によって確認して行く事」と表現されている。この様にして検証、確認されたならば、その存在を霊肉共に神に捧げるべきである。ローマ12：1これが霊的な礼拝の生涯であるというのが、潔められた者の歩みであると語られる。

2 . 神学的位置づけ

まず、我喜屋師はご自身のメッセージの神学的立場を言明されなかった故、かなり、限られた説教の資料からあくまでもこの位置づけはこちらの側で仮定するものである。我喜屋師の教派の母体団体はスウェーデン・バプテストのオレプロ・ミッションは穏健カルヴァン主義的群であるゆえ、その影響は考えられる。

聖化論自体からは外れるかも知れないが、義認論について我喜屋師はメッセージの中で、頻繁に「人生のある一点で一回きり、決断したという経験を持つ事の大切さ」「ダビデは罪を覆われた者の幸いを述べている」

「救いは覆われる事である」「贖いのふたはキリストを指し、契約の箱の中身は人の罪深さであり、神はキリストの覆いを通して我等を見られる」等から、選びの聖定によってでなく、主体的にキリストを信じる信仰によって義とされ、義とされた者には

対しては「被義的に」キリストの義が転嫁されるとする、穩健カルヴァン主義的義認論があり、また聖化のメッセージを語られる時、必ず、「贖いの概念は覆われる事」「御霊の内住＝新生」「御霊の支配＝聖化」「聖霊の満たし＝キリストと共に天にある事の確認＝栄化」の順序で語られている様だが、この聖霊論における分類は、救済論の順序を尊重する点でも穩健カルヴァン主義的であり、エペソ書に基づいて聖霊の満たしの根拠を栄化の約束に措かれている事は、聖徒の堅持についても握っておられたと考えられる。

問題の聖化論であるが、この様な救済論の土台の上に、聖化においても漸進的な思考から派生して、潔められるべき罪の問題を一つづつ扱う姿勢があり、ウエスレーの危機的聖化の様に「完全」を状態としては、はっきりとは規定されず、自覚的に御霊にある実感を経験する事の意味では聖化に「転機的局面」が存在する事を主張されている。これは、ご自身が関西聖書神学校において危機的聖化の教えを受けられた事と大きく関係している様に思える。また、十字架の死と葬りと復活の出来事を、ローマ書のガイドラインに当てはめて考えられる方法は、小島伊助師の「義認、聖化、栄化」、ウオッチマン・ニーの「キリスト者の標準」の
手順と非常に親近性を感じる。特に、十字架の行程の描写の用語の創造性においては、小島師の影響が大きい様に思える。次に、我喜屋師は信仰を働かせる為の原理を「まず、一定の事を知る事、それに理性的に判断し、認識(納得)が与えられてその上で、献身に結びついて行くようなダイナミズム」を強調される。

これらは、ウオッチマン・ニーの「キリスト者の標準」の構造であるとともに、ケズイック聖会の内容構成にも非常に類似している。これも、可能性であるが、我喜屋師は小島師、ウオッチマン・ニーのケズイックの神学のガイドラインにおいてご自身の聖化に関する神学的エッセンスを当てはめて聖化のメッセージを構築されたのであろう。関西聖書神学校がウエスレーの神学、ケズイックはカルヴァン主義の影響を受けたウエスレー主義である事を考えると、我喜屋師の神学的位置づけは基本的に穩健カルヴァン主義の土台の上に、聖化においてウエスレー主義の自覚できる転機の視点を取り入れたウエスレーン－穩健カルピニズムと規定して良いかもしれない。

b . 我喜屋聖化論の特徴と傾向

全体的に我喜屋師のメッセージは「恵み」のメッセージという評価が関係者間では一般的であるが、その理由として、聖化を語られる時に「義認の根拠」と共に、「栄化される保証」の順序の中にある、「聖化」として語られる方法が、義認と密接に結びついた聖化の「地位的聖化」の強調を優先的に示しつつ、「実質的聖化」を論ずる故、平明に言えば、そのバランスが「クリスチャンは救われ、キリストと一心同

体になっているので、当然、聖く歩んで行く様になっているのです。」という安心感を与えるものだからです。また、

「潔めを経験した者」の具体的なイメージが「キリスト者の完全」程は提供されていないので、完全論を誤解した人々が陥りそうな心理的無意識の領域で「ある状態に達する事」を意識しすぎて、信仰の強度によって潔められると考える傾向からは守られる。聖化において大切なのは、ウエスレーも指摘しているように「潔めを求める所の、神に対して習慣的、継続的に捧げられた意志、覚悟」である。

しかし、順序立てて、段階的に聖化を捉えて行ける神学である故、転機の局面において、自我との「分離」、の局面の理解、「罪とは縁が切れたという実感」、ある意味「地位的聖化」の時点で納得してしまい、「御霊によって歩む」、信仰をもって献身して行く、面の促しが弱くなる可能性はないだろうか？人の主体性を引き出す機能としての説教を考える時、どこまで説明的であるかは難しい、微妙な問題である。

* 両神学の考察の結果の発見

自分自身、聖化を考察する時に既に聖化に対するイメージがあり、神は全ての人に同じ体験を持って潔められるという偏見があった事と、聖化論だけではないかも知れないが、聖書の教理は提示の仕方において非常に微妙な問題を含んでいる事、言葉とイメージの問題、主観と客観の視点のバランス、そして、教えの受領者の反応もまた、それぞれの人格、霊的成長の程度、経験、環境等によって変わってくる事考える時、如何に語るべきか？いつ語るべきか？を常々考慮しなければならないと痛感した。

具体的には、聖化の前提において、どの程度ある人が義認の確証を握っているかによって聖化のメッセージの提示方法は変わって来るのではないか？と思う。初信者の場合や、内省的傾向が強い人には漸進的聖化をあるいは、我喜屋師の様に段階的ガイドラインを持った教えを、最も聖化の妨げであるかもしれない情性に陥っている場合や、飢え渴きのある人々には、ウエスレー的強調が必要とされるのではないか？個人的には自分の群で教えられてきた方法論、「徹底した罪の悔改め」と「御霊の盈満」の持つ神学的意味はこの両者の教理の持つ内容の中に一つの回答がある様に感じており、いつか自教派の聖化論を考えて行きたい。